

J2.99:9

9 of 20

Oct. 1944
Vol. 2, no. 8

67/14
C

ポ
ス
ン

安
藝
人

十
月
号

x



ポ
ス
ト
ン
文
藝
次
目
十
月
號

木の葉散る頃(表紙)	文藝協會同人(寫眞)	カ ツ ト	巻 頭 言	生れ出する朝(詩)	ポストン生活印象	ボーイ・スカウト	別れの言葉	秋 雲	夕星にさやく	再 出 發	桃のかきり	夜の神秘	生活断章	郷 愁	嘲笑してくれい	刀 の 話	化石の 話	原 板
(選 明 川 外 壇 詩)																		

A・丁生画	パウエル博士撮影	進藤舟水画	久留島扶紗子	貴家まき子	有田 百	木内春波	鵠 子	浅川まさる	松井秋水	大月喜三郎	有田 百	片井溪巖子	土屋天眠	青木 伸	谷川江浦草	新聞惣太郎	瀧井生筆
			1	2	3	7	14	15	16	17	18	20	21	22	23	29	

歌 葉月會詠草集	壇 選後隨録	ヒラ轉住所	ポストンを出でて	一本の花	一本の紐	結婚と生活	ポストン風景	柳古川柳句解	壇 ポストン河柳	都々逸	開く白蓮	技師長	物外和尚	二世の悲戀	編輯後記
-------------	-----------	-------	----------	------	------	-------	--------	--------	-------------	-----	------	-----	------	-------	------

永瀬勇選	永瀬 勇	ローイ・タザワ	翠川 敬	矢形溪山	石川凡才	外川 明	北村利恵	松原信雄	島原潮風	島原潮風編	谷本晚香	長藤行精	木内春波	土屋天眠	芳川積三
33	40	48	43	52	50	61	64	57	66	70	74	79	83	86	94

懸賞小説募集

賞金 一等五弗 二等三弗 佳作雜誌

規定

- 四百字詰原稿用紙十枚以内
- 文字は楷書で認めること
- 誌上匿名可なるも住所氏名明記すること
- 宛名
- 轉住所内生活に取材せるものに限る
- 發表 新年号、二月号及び三月号
- 締切 十一月十五日
- 原稿は一切返戻せず
- 一人幾篇応募するも可

本誌を毎拜御取次下さつて居る後援者諸氏の御芳名とその受持部落を掲げ、感謝の意を表します。

オフィス病院其他	正木良夫氏	第廿部落	星野光葉氏
第二部落	貴家末ま子女史	第廿一部落	重富初枝嬢
第三部落	藤本寅之助氏	第廿二部落	江藤久氏
第四部落	玉岡貫一氏	第廿五部落	大池智慧子女史
第五部落	安本時子女史	第廿六部落	棚本米夫氏
第六部落	東彦太郎氏	第廿六圖書館	鈴木胡仙氏
第十一部落	柳本錦子女史	第廿七・廿八部落	吉里竜耳氏
第十三・十五部落	井上政次氏	第廿九部落	新野庄作氏
第十六部落	角田常男氏	第 ^{四十四・四十五} 四十四部落	島原潮風氏
第十七部落	新貝富藏氏	第四十五部落	外川明氏
第十八部落	出口泰三氏	第四十六部落	津村汀村氏
第十九部落	稲垣牧東氏	第 ^{五十三・五十四} 五十三部落	関五松氏
第廿一部落	大岡隆一氏	第五十九部落	原田準一氏
第廿二部落	大森むつ女史	キヤンプ II	岩切兵藏氏
第廿六部落	瀧井謹平氏	キヤンプ III	古賀伊太郎氏
第廿七部落	大空魁氏	全	畑下沼雄氏
第廿八部落	谷本晚香氏		

※

※

卷頭言

言葉は偉大な力を有つてゐる。人間の心を動かすに言葉以上の大きな威力を持つて居るものはないであらう。日々レディオから放送される言葉、新聞で報道される言葉、即ちニュースは、世界の人々を或は歡ばせ或は悲しませる。不平不満・憤怒・憂慮・或は悲哀・人は友にそれを打明けたばかりで、既にそれらの苦しい感情の半ばは和げられるのである。言葉は人を慰め、勇氣づける。言葉は人を生かし、又は殺す恐ろしい魔力をもつてゐる。また、言葉は我々が見る事ができないもの、過ぎ去れるもの、或は遠く離れて居るものを眼前に描き出して呉れる。

宇宙の萬有は有限であるが、その有限なるものを言葉は永久に後世に遺し傳へてくれる。人間は亡びて行くが、言葉は永存す。や基督の尊い教へが現代人に深刻な教訓を與へて居るのも言葉の力である。

戦時は勿論平時に於ても、各國が夫々自國の利権擁護と伸張との爲に、あらゆる宣傳機關を動員して、宣傳に大童となつて努めるのも、或は亦、いろいろな會社商店が廣告費に莫大な金額を費すのも、皆言葉の威力を知つてそれを利用してゐるのである。一つの言葉に依つて昨日の敵も今日の友となるのである。誠に言葉は神秘的な力を有つて居る。我々はこの偉きな力を持つた言葉、永遠不朽の言葉を惜りて、個人として、はた民族として、誠に貴い戦時に於ける敵國收容所生活の體驗を記録して残したいものである。

(N・M)

の考諸住在ントスボ
すまひ願をと立引御



賣販信通

アイオン・電気器具・クーラー用モーター
及新アア・
日本食料品一切其他
何れ御用命にたします

ニジブ商會

2639 LARIMER ST., DENVER 18, COLO.



三大製品

全大黒印白味噌
US 宝干麴
虎甲萬

特に宝干麴は自慢の品下
御座います最寄の店を見れば
多量に不物送りだします
大黒印と最寄の店下
みたが水手さん

デビーヤフリヤー街三五〇

羅府醬油味造鹽社

朝るづ出れ生

今まさに 明けんとするひかりの中に、
綿木の花 ほのかに白し。

木々の葉の ゆらぎなきは まだ目醒めざるらし。

池のそばの草にのみ 露のおりて、
淡月をやどしてあれる。

萬象 このごとく 漸く生れ出でて淨し。

我がなせしことかくも小さく、

我がなさんとすることの いかに貧しくとも、

今まさに明けんとする 静寂の中に立ちて、

世界の人の全てに 悠久なる平和を もたらしたまへと。

朝あした

朝あした

に祈る。

一九四四、八、七。

子 紗 美



ポストン生活印象

(二)

入所第二日目

貴家志ま子

我等同胞の別天地たるべく、未開の沙漠の廣野に建設されたる數多のバラツクの内の一室、既に假のわが家と定められた住所名ブラツケニ・ビルディング七・アパートメントB・ポストン・アリゾナといふ幾つもの名稱や番跡に依つて區別されたる所名を、手帖に書きつけて記憶すべく再三讀み續けた。入所二日目であるけれども、太陽の光線に依つて總てを明かに見た收容所の光景は今日をもつて最初とするのである。

朝起き出て室の窓から向ふに林が見えた時に、私は素晴らしいものでも發見したやうな歡喜に溢れたのであつた。

『あの林だけは全く儲けものでしたね。』と同居の人等といひ合したやうに口走つた。男子は先づきのふのめい／＼の手荷物數十個の運搬に忙はしく、女子はバラツクの端まで水汲みに通ひつゝ室内の掃除をしてゐた。

この部落の厨はまた總ての準備整はず、やがて他の部落の食堂に行くべく焼け付く如き炎暑の中を、道のついてゐない深い焼砂の地面へ、一歩踏み入れて

は一步を抜き出し、またザフリとすべり込む足どりは、遅々として進まず途中にして私はひき返さうと思つただけけれど、同伴の夫に勇氣付けられ、食堂に入り一皿を貰つたが遂に喉を通らなかつた。これが入所初めて味つたポストンの灼熱であつた。

午後男子等は室内の棚造りで、板屑などをひに行人、貰ひに行人、擔いで来る人、室内は板を挽く音、釘を打つ音で轟しい。まだこれから沙漠の原にもつと新しい家でも建ちさうな騒々しさである。

夕べ同居のミセスが「こんな大きな節穴がゆかに幾つもあるては大きな蛇でも頭を出しはしないでせうか。」といひつゝベッドの上で肩をすばめた。このたぐさんの節穴さへ、時には至極便利で、飲み残りの水や塵屑は居ながらにしてそこから失敬さしてしまふ。並んだ床板の長い隙間は鋸をさし挟んで板を挽くのに詭向きである。隣の人に一寸ものをいひ度い時は、やはり居ながらで聲さへかければ對座して話すと同様によくわかるのである。

さてこの一室僅か幅廿呎、長さ廿五呎の小さい室を二等分して、二家族の寢臺の位置を定めなくてはならぬので今朝職を引いたら、同居の人達の方が室の入口側に當つた。自分等に定つた方と隣との堺の壁に漸く假の棚を一つ夫が造りあげて、足の踏み場もない程散在してゐる雜品の内、その或部分をまづそこへ積み上げた。

隣でも同一の壁際に盛んに金銀の音を響かせてゐる。そのうちにアツと思ふ間もなく、自分等の棚が片方はづれて品物は悉く崩れ落ちてしまった。腹立たしい心地になつてそれらを拾ひ集めてゐる私の心に、昔讀んだ浪六の『八軒長屋』の或部分の記憶が蘇りその光景があり／＼と思ひ出された。

『八軒長屋』は其時代の東京の貧民窟生活を、浪六の筆に寫し著された小説である。日本の大都市の貧民窟と、今日我々同胞が直面してゐるこの特種生活とは全然異つたもので、こゝに比較するべき性質のものではないのだが、前處に列挙した室内の有様は、宛らかの貧民窟に現はれたる生活状態のある部分に能く似通つた共通の点を今私は眼のあたりに體驗して居るのである。

この室から一丁程も離れた所に、共同の洗面所兼浴場並に廁がある。その中に初めて入つて、私は茫然とツツ立つたのである。何の圖ひもない十個のトイレットは五個づつ二列に並んでゐた。次々にどよ／＼と入つて来る婦人等はひとかたまりに立つた儘大騒ぎである。一人の子供は母親が宥めずかしても多勢の人中では厭だといつて遂に泣き出した。

浴場といつてもシャワーであるが、同居の娘も私の娘もそこへ入る時はめい／＼の親が布を持参して入口に張り、他人の入るを防ぐ爲に立つて番をした。然し斯様な集團生活にはこんなことは不可能であつた。

ボストンの飲用水には一種異様の形容出来ない臭味があつて、水道の口から

出ながら既に嗅を放つのでこれだけは婦人子供のみではない、同胞全体の惱みのひとつである。

室の裏側の窓から向ふに見えるモスキド・ツリーの林の手前の砂原に、銃を擔いだ一人の見張りの兵士は、いつ見ても同じ場所に立ってゐる。馴れないこの今日の生活は自分等ばかりではないと、かの兵士を見る毎に私の心はおのづから柔いのである。

夕刻になつてから外に集つてゐる人々が「スコーピヤン（さそり）」がゐたと、いつて大騒ぎをしてゐた。

眼に入るもの、聞くもの、己の爲さんとすること、爲すべきことの悉くが以前の生活とは餘りにもかけ離れた一大変化をつくぐと思ひめぐらした。

けふを送りあすを迎へ又そのあすと、次々に生きてゆかねばならぬこの集合生活に忌はしい出来ごとかもも醸し出されるであらうなど、眠れぬまゝにはや取越若勢に心は向つたのである。

布袋のマドレスのヘイの片寄りした寢臺の上で第二日目のポストンの夜は明けなむとしてゐる。

(つゞく)

○安らかに自由に生きたいと思つたら、無くて済まされる贅澤物を自分の身から断つがよい。未だ會てなにも、あまり素樸に暮し過ぎたと後悔したためしはない。



ボーイ・スカウト X

有田百

△文藝八月號の拙文『教育管見』廿五頁「ボーイ・スカウト」(少年義勇軍)に關し更に詳細に亘り報導すべき要求があるので其概畧を記述することにした。尚ほ従来參考資料を蒐集してゐたボーイ・スカウトの善行、佳話と稱すべきもの一切手許にないので、或は時日、姓名等の誤りあるべき事は豫め讀者の了解を願ふ所である。

△創始者 英國人ベーダン・パウエル卿が千九百七年英國に於て創設したものであるが、少年の行跡の見るべきもの頗る顯著である。みなならず、國家社會に及ぼす影響の實に偉大にして、切實に有知なることが認めらるゝ所となり、遂に世界的の大團體となり、パウエル卿は千九百二十年世界少年軍聯盟の會長となつた。

△米國にては千九百十年二月八日創設され歴代大統領が名譽會長となる事になつてゐる。團員数は千九百四十一年十二月廿一日の發表によれば少年軍が百五十七萬〇九百六十二名。カッブス(十歳前後の児童で少年軍の前課程)五十九萬一千六百八名である。本部はニューヨーク市にあり。又全國を地域別にして(大都會は別として四、五カウンティーを一區劃)それ／＼支部を設けて指導

監督及び一般事務を取つてゐる。

△目的。児童犯罪の一番多い年齢は統計が示す所では十二歳から十六歳の間である。此危険期を少年一般の趣味に合致させて訓練し、善導して國家有用の市民を養成しやうと云ふのである。

△例へば、少年時代は山登りとか、野營、興味を持つ。山に行けば主な木の名又は動物を研究する。つまり博物學を學ぶのである。毒草や毒虫を研究して、それが豫防及び手當法を習得する。又趣味の天体を研究し道に迷つた時の準備をする。マチスが無くなつたとする。自然發火法により用を足す。料理は如何にして調理するか、酒や煙草より遠ざかり、口や耳は所謂三猿主義でなくてはならぬ等々である。

△標語。少年軍の標語は「準備成れり」である。有用なる市民は非常時突發の際に當り、之が救済の手段方法を誤らず、即座に役立たねばならぬ。夫等の訓練は公立學校の學科以外の餘暇に習得するのである。即ち應急手當法、水泳及び救命法、高壓電氣避難法、繩の結び方、野外科理法、及び野宿等の練習をして「準備成れり」の態勢を執るのである。

△日に善行一度以上を他人の爲にせねばならぬ。例へば母のために洗濯したり、部屋の掃除等も其一つである。自分よりも先づ如何にせば他人のたふにならぬかを先に考へねばならぬ。危険身に迫つて生命危しと云ふ場合に際會したとする、先づ最初に如何にせば他人の生命の安全が計られるかを考へねばならぬ。それが眞の人の道である。要するに自己の力を益々培養して常に他人の爲に價

値ある働きをする。自己を犠牲にしても公衆のために奉仕するのである。

△人種、宗教、貧富觀を超越した平等觀に立脚した、總ての者が友愛關係である。互に援助し、協力しヨリ良き市民となることである。アメリカは世界の『メルテング・パット』(埧場)である。各自の力を益々發展させる。而して皆は親愛なる友である。と云ふ精神の下に新しい市民として進展するのである。さうする事によつて眞の自由が向上するのである。受けるのと云ふよりは奉仕するのと云ふ事が第一義である。リンコルンが言つた。『世界をヨリ良くするのである。何人となれば我等の小さい生命が此世界にあるからである。』我等は我が少年軍の金科玉條である。更に此主義を他人に擴張して行つてアメリカに於ける生活の行進曲にしやう。そして軍人、非軍人派又は政界、及び經濟等の葛藤から超越するのである。

△以上のやうな事が少年軍の主旨であり、理想であり、訓練の一般方針である。更に少年軍の宣誓を見ませう。

宣誓一 私(わたし)は神と國に對する義務をつくします。そして少年軍の規約に服従します。

二、常に公衆の爲に奉仕します。

三、私自身健康を保ち、精神的に覺醒し、道德的に健全にします。

△次に少年軍の綱領を檢討しませう。

第一條 團員は信任さるべし。

若し團員が嘘言を吐き又は誤魔化したリ、或は與へられた仕事を完遂

せざる様な場合は、人から信頼されないであらう。團員の記章を冒瀆するものなり。

第二條

團員は忠誠なるべし。

總ての義務に忠實なるべし。指導者に對し、家庭に、又両親に對し、國家に對して忠誠なるべし。

第三條

團員は有用なるべし。

團員は常に人命の救助、負傷者の手當を爲す準備を爲し置くべし。家庭の仕事と分擔すべし。尚ほ毎日一回以上は他人のために善事をなすべきものとす。

第四條

團員は友愛なるべし。

團員は總ての人に對して友愛なるべし。又他の少年團員に對しては兄弟の誼あるべし。

第五條

團員は禮儀なるべし。

團員は總ての人に丁寧なるべし。特に婦人、子供、老人及び虚弱なる人並に頼りなき人に對し、一層親切を盡すべし。而して奉仕に對しては一切報酬又は謝禮(金品)を受くべからず。

第六條

團員は親切なるべし。

團員は總ての動物の友たるべし。必要以外總ての生物を殺し又は傷害してはならぬ。進んでは無害動物の保護に骨折るべし。

第七條

團員は従順なるべし。

第八條

團員は彼の両親及び少年軍指導者又は役員に對し従順なるべし。
團員は快活なるべし。
團員は能く限り笑顔を爲すべし。命令を受けたる時は直ちに、愉快に其命を奉ずべし。如何なる艱難の仕事でも横着したり、不平を言ふべからず。

第九條

團員は節約すべし。
團員は物品を徒らに破壊し又は放棄してはならぬ。働きに對し忠實なるべし。無用に時を過してはならぬ。機會ある毎に最善を盡して利用すべし。貯金すべし。而して金は必要に應じ又値打ある奉仕のために使用すべし。團員は仕事に對する給金は受くべし。而し禮儀を爲し又は善事を行ふ場合は断じて金品を受領すべからず。

第十條

團員は勇敢なるべし。
團員は危險に遭遇しても勇敢なるべし。そして正義の前には、友人の甘言、嘲弄又は敵の威嚇に對して例へ負ることありとも、精神的には断じて負けてはならぬ。飽迄勇敢なるべし。

第十一條

團員は清潔なるべし。
團員は身体及び精神共に清潔なるべし。善き言葉を使ひ、良き遊び、佳き習慣を爲すべし。而して又清潔なる場所に旅行すべし。

第十二條

團員は尊敬すべし。
團員は神に對して尊敬すべし。自己の宗教に忠實なるべし。而して他

人の宗教的儀禮、習慣及び其宗教に對し同様尊敬すべし。

(12)

△讀者は少年軍の如何なるものかに付大體に於て了解されたいと思ふ。次に實際的方面に就て紹介すると、聊か我田引水の嫌はあるが、筆者が奉職してゐた、サンオン日本語學校は、筆者奉職と同時に少年軍を組織し、學徒全部を悉く團員に編入し訓育實に十幾年、此間父兄の熱心なる後援と相俟つて、我學童は總ての點に於て、特に精神方面に於ては断然先つてゐた事は世人の定評である。△筆者は最近一人の學童の行動を注意してゐた。その學事に熱心なること、何事を命じても愉快に應ずること。決して反抗的又は嫌と云ふ素振りがない事、完全に命令を果す等、出色してゐるので之を調べると少年軍の團員であることが解つた。

△児童教育研究家は或は記憶にあると思ふが、今より七八年前の出来事である。ニエーヨーク市であつたか電車と電車との間に挟壓されて多數の人が負傷した。内十三歳になる少年ジョンソンは、電車の輪に噛み込まれて腰より下はザク／＼になつた瀕死の重傷者であつた。先づ此少年より救助すべく人々が手を下したが、

『私よりも酷い負傷者があります。其方を先にして下さい。年取つた人を先にして下さい。私は輕傷です』と言つて拒絶する。

『お前は重傷だから先にする』と云へば、『私は少年軍の團員です。外の人の手當を先にして下さい。』と断固として應じなかつたのである。之は新聞紙上で全米に宣傳されたのである。

△日支事變は遂に上海に飛火した。租借地及び居留地一帯は砲煙に包まれ、社會の秩序は極度の混亂に陥つた時、支那少年軍は居住日本少年軍と共に敢然起ち危険を物ともせず、郵便物配達及び整理をしたのである。

△少年軍規約全條を檢討する時には東洋の道德其まゝと言つてよからう。特に第二條の如き、指導者に對して敬に、親に對して孝に、國に對して忠なるべき事を力説してゐる。若し我等の子弟が少年軍規約によつて、幼少より精神的訓練を授けられてゐたなら、我ホストン公立學校に於ける男性の如きいまいしい事件の瀬發は起らなかつたであらう。

△之を要するに少年軍の養成は國家社會の有用なる要素を醸成するのみならず、團員が一生を通じてそれ自身の爲に何れだけの幸福をもたらすかは實に計り知るべからざる所であらう。

△法規法文は冷やかな文字の羅列に過ぎない。又、精神づけるのは人である。ボーイ・スカウトの訓練も其人も得ずんば一個の裝飾品に過ぎないであらう。

○自分で勞苦せず、他人の勤勞によつて生きてゐる凡ての人には、たとへ何と自稱しようとも、自分で働かず他人の勤勞を利用してゐる限り、一人残らず盗人である……たとへ如何なる品物にもせよ、これを使用する場合には、それが人の勞力の所産である事を、従つて、その品物を消費したり、いためたり、こわしたりする事によつて、諸君は他人の勞力を、時にはその生命をさへも、消費するのだといふ事を想起するがよい。

(先哲の言)

ポストン文藝詩壇

外川明選

別れの言葉

どうしても

行つてしまふか君

浮草の 水のまにまに

定めなき ふたりの運命。

追はれ來し沙漠に

ふたとせの儚なき宿よ

眼に見えぬ運命に追はれ

袖を別ちて 西へ 東へ。

木内春波

再會のその日も知らず

断ち切れぬ心の糸よ

遺瀨なきわが胸ぬちを

知るものはたゞ 夕空の三日月。

さらば 君よ

いづくの地球の果に

よき妻となり母となるとも

アリゾナの沙漠の一隅に

マスキツドの樹影に

結ばし夢を 忘れ給ふな。

秋雲

鴉子

ひとり 静けさを求めて、

果しなき 荒野に佇てば、

はるか 野末ながるゝ。

秋雲さびし。

遠き日の追憶のかずくも。

今は空しく、

深き憂愁に鎖されて、

鉛の如く心重たし。



夕星にさゝやく

浅川まさる

(1)

なんにも説明はすまい

私一人が悪人になつたら

それで一切が解決するのだ

それでいいのだ

なあ 夕星よー！

それで、それでいいだらう。

(2)

愛せばとて

愛さるればとて

所詮は孤り孤り生きてゆくべき

星々の運行と同じ人生なのだ

なあ 夕星よー！

生死を共にと誓つて入所した人々が

次々に別れ・別れてゆく……。



詩再出發

マツイ・シユウスイ

白熱眼を射る

眞夏の都會の日曜だ

人波溢れる教會堂の通路と

若者の勢を示す

十字路の自働車の集り

その難者と雑音の底を流れる

人生劇の悲喜曲……………

x x

でもその大道に響く

交通の轟きよ

もはや僕には聴えない

聴覚神経に傷を付けられ

精神には異状を起しつゝ

總てのものに

復讐と祭狂とが映るのみ。

x x

僕は捨てられたる者

だが僕を精神病者にさせて

富貴榮華を貪つた者は

誰？ 誰？

あゝ あの二年でふ

時の道化者だった。

x x

僕は黙々と

また この大道を歩く

小さいけれど未だ切れてゐない

自己の脈搏を静かに感じつゝ

聴えぬ耳、見えぬ眼

あゝ 何もなき尊さよ

おゝ さうだ僕はもう一度

零時零分秒からしつかりと

歩み出さなければならぬのだ。

(デンヴァーの一隅にて)

秋雲

鴉子

ひとり 静けさを求めて、

果しなき 荒野に佇てば、

はるか 野末ながるゝ。

秋雲さびし。

遠き日の追憶のかずくも。

今は空しく、

深き憂愁に鎖されて、

鉛の如く心重たし。



夕星にさゝやく

浅川まさる

(1)

なんにも説明はすまい

私一人が悪人になつたら

それで一切が解決するのだ

それでいいのだ

なあ 夕星よ！

それで、それでいいだろう。

(2)

愛せばとて

愛さるればとて

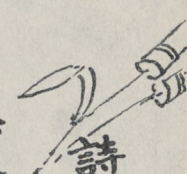
所詮は孤り孤り生きてゆくべき

星々の運行と同じ人生なのだ

なあ 夕星よ！

生死と共にと誓つて入所した人々が

次々に別れ・別れてゆく……。



詩再出發

マツイ・シユウスイ

白熱眼を射る

眞夏の都會の日曜だ

人波溢れる教會堂の通路と

若者の勢を示す

十字路の自働車の集り

その雑沓と雑音の底を流れる

人生劇の悲喜曲……………。

x

x

でもその大道に響く

交通の轟きよ

もはや僕には聴えない

聴覚神経に傷を付けられ

精神には異状を起しつゝ

總てのものに

復讐と榮狂とが映るのみ。

x x
僕は捨てられたる者

だが僕を精神病者にさせて

富貴榮華を貪つた者は

誰？ 誰？

あゝ あの二年でふ

時の道化者だった。

x

x

僕は黙々と

また この大道を歩く

小さいけれど未だ切れてゐない

自己の脈搏を静かに感じつゝ

聴えぬ耳、見えぬ眼

あゝ 何もなき尊さよ

おゝ さうだ僕はもう一度

零時零分秒からしつかりと

歩み出さなければならぬのだ。

(デンヴァーの一隅にて)

句 俳 律 由 句

朝の食の桃のかをり

大月喜三郎

朝の桃のかをりのやはらかさは對ひあって

へちまの青葉に影があるので下駄でゐる

朝顔のはな、郵便はそこな娘に渡してゆく

なにかもうれしくて子供杏の種子が笛になる

ごくだみの花の白い夕ぐれのをとこの子をとんなの子

すゞしさはぬれて晴れて筭草の青さよ

家の表に水撒いてバケツに柄杓も昏れました

おはぐろとんぼ目のぬくみが未だある草の由まで

日輪草のおもたさは今日の陽の沈みたり。

夜の神秘

は
げ
む

ふと目がさめた。午前三時。

窓から射し込む月光は、

丁度私の枕を越して、

読みかけの『虞美人草』に落ちてゐる。

神経が妙に冴へる。

浴衣を打掛け、下駄をはいて、

部落中央の庭に出た。

峨々たる

加州境の岩山の上に懸った、

廓の電燈は、

すく／＼と伸びに成長んだ、

水々の緑葉と、枝と、幹を照らし、

すべての物を美化し、幽玄化してゐる。

シヤフ・ハウスの電燈の下に、

傲然と、前肢を張つて、端坐してゐる大蝦蟇^{かま}。

火目玉口、異様な、凄しい光りを放射^はつてゐる。

思はずその前に釘づけにされた私の足。

尚ほ、よくその傍を視ると、

細い觸角を、ぴりつかせながら、

微妙な足取りで、匍^はつて来た、一匹の蟋蟀。

ギョロリと動いた蝦蟇の目玉！、

体をかゞめ、大口を開いた瞬間、

カブリと、蟋蟀は呑みこまれてしまった。

そして、蝦蟇は、何喰はぬ風を装ふて、

たくましい丸の面構えにかへつた。

△

△

△

深い、深い大空から、

星達は静かに、此風景を眺めてゐた。 四四、七、二七、

生活断章

三
朝顔・蟬・トンボ
おくらば
目見草・すあし

片井溪巖子

大輪の朝顔咲く、

るりいろの幸福感。

蟬が啼く。

ロッキ―山へかけて、

ひとやすみする。

トンボちよつと来てゆく、

うらにも黄菊の花。

日曜をむつまじい靴音、

そこのバスラインまで、

咲きほこる家々々、

くさばなをめでつゝ、

ニッポン語で話しゆく。

みどりの ふかいかげから、

ふたりの あしもとから、

ひろひあげた わくらば。

たなごころにのせた、

いみじきメイプルの、

うらおもてかへして、

みせてそのひとはを、

おほきいハンドバツクへ、

ていねいにはさむいとしさ。

(六、六、朝)

ほのかなる月見草の、

あえかなる花の、

さきのぼる　すゞしさの、

ゆふべの　風の、

ふかろゝ中の、

つかれたる　心身。

※ ※

そつと　うらからでる、

まんげつのかげふむ、

わすられた素足の、

わけなくうれしい、

つめたい草の觸感よ。

一步は露　一步は光り、

やんでは啼く　コホロギの、

この涼しき　しらべよ。

生のかぎり唄ふ。

至醇なる　この享樂者よ。

(八、八、宵)

※ ※ ※

御愁

土屋天眠

假りの生活たつきの侘住居

心を千々に砕く時

想おもひは馳はする祖國くにの空

同胞はたら如何に在すらむ。

※ ※

風静かなる高原に

待て前途を忍ぶ時

想は馳する祖國の空

父母ちち如何に在すらむ。


※ ※

夕空高く月清く

蟲の音耳に冴ゆる時

想は馳する祖國の空

弟妹ていまい如何に在すらむ。



詩 嘲笑してくれていゝ

——或帰米二世の青年の歌へる——

友よ・理解してくれるか

凝視める青葉から滲み出すこの泪

孤り生きゆく青春の旅路には

戦場に身を曝すより以上の苦惱のあることを

灼熱のアリゾナの沙漠の暑さより

もつと堪へられぬ熱き焰の燃ゆることを。

友よ、先輩よ、有難ふ

皆々の親切も忠告もよく解るけれど

たゞこのまゝキャンブに落着いて居られぬ

誰にも打明けられない煩悶があるのです

見送りの人々よ、泪は禁物だ

蟬よ・鳴くのは止めてくれ

蝙蝠よ・何が面白くてそんなに飛び廻るのか

僕は・當もない旅に飛が出てゆく……………。

青木伸



刀 の 話

谷川江浦草

張鼓峰事件の頃であつた。都下の全紙に栗原と云ふ一中尉が、日本刀を以つて敵兵諸共機関銃まで切放したと云ふ記事がデカ／＼と掲げられた。どうも話が少し大き過ぎるなとは思ひつゝも、讀んでゆくと、日本刀の精華を廣く知らしめる爲に、その軍刀と機関銃とを内地に送り、一般の觀覽に供することゝなつた。と報道してゐる。實物を見せると云ふ以上まんざらの作り話でもなからうが、昔からこれに類した話は至極多い。例へば黒田如水が朝鮮役の際に碓を切つて船を出したと云ふ。碓切、或は今川義元の祖範圍が兜り鉢を真二つにしたと云ふ國吉作のハタ玉、その他上杉謙信の鉄砲切助真等々の名稱を附した名刀で、現存してゐるだけでも可なりの數に上つてゐる。係し何れにしても斯うした語り傳へは文字通り話半分にも聞けないのが多いのではなからうかとは誰しも疑ふところである。鉄を以て、鉄を切るなど、云ふことは常識の世

界に住む吾々には、一寸説明のつきかねる話だ。あるひは衝撃を加へた
 拍子に叩き折つたのではなからうか。それなら又話も別で報道記者の誇
 張しさうなことだと、獨り合点をした儘忘れるともなく忘れてゐた。そ
 れから何ヶ月か経つた頃、その軍刀と機銃とが上野に出陳されたと聞い
 たので、フト思ひ出して出かけて行つた。行つて見て驚いたことには確
 に空冷式重機関銃の銃身が附根のところから斜つかひに真二つに切り放
 されてゐるのである。しかも傍に架けてある日本刀には何の異状も認め
 られないのだ。一瞬！私の頭の中にはどこかで讀んだことのある、一和
 蘭人の著『日本誌』のことがグン／＼大映しとなつて浮か上つて來た。
 蘭人モンタナスが織豊時代から徳川初期の文物、風俗を詳しく歐州に紹
 介した『日本誌』の中に、日本刀を以て歐州製の刀を切るに葦を切る如
 く容易であり、然も切つた日本刀には少しの疵も出来ないことを驚歎
 して述べてゐるが、この話を文字通り信じなければならぬ事實が目の
 前に展開されて居るのである。『羽織の紐と、理窟とは後からつく。』と俗
 に云はれるが、人間など可笑しいもので信じ難いことでも、事實として
 眼前につきつけられると、むづかしい説明までも後から出來て來るもの

らしい。傍に立てゝある説明書きを讀み乍ら考へて見た。説明に依るとこの軍刀は関の孫六兼光で中尉が突撃をして猛射してゐる露露兵に切りつけたら、勢ひ余つて下の機銃迄も切り放したとある。この関の孫六が眞作であるかどうかは第二として、此刀で切りつけたときには銃身は猛射に依る高熱の爲幾分か軟らかになつてゐたに相違ない。これは氷点以下三四十度の所では鋼も脆くなることゝ同様考へられぬことではない。そこを鑑、兎の太刀打に堪へる様に作られた本物と断る理由は偽日本刀が近來作られてゐるからの日本刀で割りつけたのであるから、ザツクリ斬り放せたのも有得る話であるゝなとゝ一應説明をつけて安心したものゝ、その銳利さに對する驚きは依然として後に残つた。それからのは、何でもいゝから一口素性の知れた古刀を購ひ、朝夕拭ひをかけて眺めて見たいものだと思ふ様になつた。が、刀に關する本をあさつたり、刀剣屋の主人と懇意になつたりしてゐる中に、二百圓や三百圓では新刀の水心子正秀一つ買へないことがダン／＼判つて來た。もと／＼素性の知れた刀を求めたいと思ふ様になつたのも三百圓の和泉守兼定や五百圓の村正を神田辺の刀屋で見てもからうことであるが、考へて見れば馬鹿／＼しい

話でそんぢよそこらの店先に眞作の兼定や村正のあらう筈がないのである。豊臣秀吉の「刀狩り」以来民間には刀らしい刀は存在して居ない。宙宇帶刀を許された大町人でも、幕府を憚つて名ある刀剣を蓄へることは當然遠慮した。従つて古来、名ある人の作と傳へられる刀は殆ど大々名か徳川一門の所有に限られてゐた。論功行賞に一國一城を興へる代りに名刀を興へたと云ふ様な話は數限りなくあることで、事實名作と稱せられる程のものは、現代は云ふ迄もなく舊幕時代でも數萬金を以て取引きされてゐる。明治初年、廢刀令が布かれて以来、可なりの刀が國外或は坊間に分散されたが、名刀と云はれる程のものは殆ど各家に保存された儘である。従て掘出しものなど、云ふものは、日本國中足を棒にして歩き廻つても先づあり得ないことである。今も云つた通り村正だ、兼定だ、正宗だと銘を鐫つた刀は無名の刀屋は云ふ迄もなく、全國的に何萬口とあらう。が、刀の銘ぐらいアテにならぬものも一寸類がないのである。その一、二の例を挙げると、本阿弥家の銘鑑に記載しある正宗は驚く勿れ一萬口、その中有銘正宗が約三千口となつてゐる。ところがこの中で、専門家が確實らしいと認めてゐるものは約五十口、その中有銘

の確實なものと、是認されてゐるものは僅か二口しかないところであるから想像も出来やう。因にこの有銘正宗はどちらも短刀で一本は不動正宗（徳川義親侯藏）と稱せられ他は大黒正宗（堀田伯藏）と呼ばれてゐる。本阿弥家の折紙附にさへこの様な不確實なものが入つてゐるのは、正宗の流れを汲む新刀、例へば源清麿（四谷正宗と稱す）とか大坂鍛冶の出来のよいのが正宗に化けてゐる為である。それはまだしも二、三日前に出来上つたと云ふ様な洋鋼延棒式の所謂昭和刀などが羊頭狗肉をかゝげて、堂々正宗になりすましてゐると聞いては開いた口がふさがらぬのである。併しこの種のものは取締りが嚴重になりつゝあつたから漸次影をひそめるであらうが、今更どう取締つても追つかないものがある。それは同じ流派の中に同名の刀工が多数あるところである。例へば同じ備前長船系の祐定でも時を異に場所を異にして十数名の祐定がゐる。その中には興三左衛門祐定とか源兵衛祐定とかの如き名工もあれば十束一からげの鈍工祐定もゐるのである。同じ真正銘の祐定であつてもこの様に雲泥の差がある。それ故、銘を信じて刀を買ふ位馬鹿げた話はないと心得てをればまあ失敗することはないであらうが、一寸名の聞へた刀

が無名の刀屋にあつたり、普通個人の所有に属してゐたりしたならば、先づそれは偽物或は二、三流品だと思つても間違ひのない所である。要之、刀の良否真偽は姿、地肌、刃文、茎の形、鏡目等の特徴を捉へた専門家の鑑定眼に信頼するより外途はないのである。話は元に戻るが、機銃を切つた孫六兼光にした所が普通人のザラに持つてゐる刀ではない。ある有名な現代の刀工が戦地より歸つて來ての語に、一千口の軍刀修理を行つたが眞作若くは上作と思はれる物には十数口しか出會はなかつた。粗先傳來の金剛兵衛です、など、嬉しさに偽作を持つて來る人などあつたが、これは本物ではないとも云へず唯、これは少し疲れてゐますから用心なさいと婉曲に注意するよりなかつた。と述懐してゐた。これを以てしても機銃切りが一步譲つて兼光としても、果して孫六であるかどうかは疑はしい。併しそれでいゝのである。刀必ずしも名刀、上作でなければならぬことはない。日本刀は古刀であれ、新刀であれ單なる洋鋼の延棒に焼きを入れた心金なしの丸鍛と違つて、第二流第三流の刀であつても、日本刀獨特の製作法（後述）に依つたものである以上その切味は優れてゐるのである。

（續く）



化石に関して

其二

新関惣太郎

日本の化石は、地層が重に新生代 CENozoic のものである。比較的新しいのであります。東京や大坂の地下からは、大ビルディングの基礎工事とか、地下鉄の工事、又は堀割や運河、鉄道工事等の土塊中から、澤山の介殻を見出すのであります。中には余程珍しい現代の介類に跡を消したものと等もありますので、相當學者の注意を引いて居ります。

曾て大坂の南海電車灘波驛の工事中、地下二、三十尺の所から随分澤山の介殻を發掘しました。或る學者は昔の貝塚の一つではないかと申しましたが、よく研べて見ると、無數の石器時代の遺物を含む、直下にあった爲の誤解で介殻其ものは、食用に供したものであつた。其處に以前から棲息して居つた介類が、其儘埋没されたものであつた。當時の居住民とは何の關係もないものであります。

斯様な事から色々考察して見ると、大坂の下町一帯は昔、海であつた事は事實であります。東京に於ても同様であります。其範圍は遠く王子邊迄も續いて居るのであります。荒川放水路を掘つた時にも、全線に亘つて無數の介殻を

出して居ります。それでは介殼も化石の一種かと云ふ事になるのですが、其事は前にも申し上げました通り、

化石の定義

でありまして、常識の上から申しますと、化石とは所謂石に化したものでありますから、洪積世の介殼等は、化石とは云はれないと思ふのは無理もないけれども、岩石の場合に於きましても、石と結合のない土砂とは、判然とした境界がありません。従つて化石とおふものを定義するに於ても、矢張地質學者の考方、即ち「地より掘り出したるもの」との意味で、地質時代に棲息した生物の遺骸やら遺跡なりを總稱して、化石と名付けて居るのが正しい様に思はれます。それ故、東京や大阪の地下から出た介殼は立派な化石の部類に入れて、少しも差支ないものであります。

象類の化石

岐阜縣可児郡の中新世には、MIOCENE、トライロフォドンと稱する象の一種の化石が発掘されて居ります。今の象は上顎に二本の牙があるのみであります。此古い象には下顎にも牙がありました。そして此動物は濕地の軟かい草根を其牙で掘つて、餌として食べて居つたものらしく、其口先は長く延びて居りました。更に下つて鮮新世の地層からは又、ステブデンの化石が発掘されて居ります。之は余程今の象に近いが、齒の構造が、トライロフォドンと現代象との中間であります。又更新世の地層に來ますと、無数の象が見出されて居ります。中には寒地に住む、マンモスや、熱帯に居るインド象も含まれて

居ります。森林に住んだ家もあり、原野を好んだ家もあり、更新世の日本氣候は、寒い時と、暖かい時とが繰返されて居つたものと思はれます。

東京の田端で、二十年ばかり前に矢張り象類の齒を發掘した事がありました。又象の齒や骨は下町でも、浅い介殼層の下から屢々發見されました。其外瀬や肉海の近傍等にも所々に發掘されたレコードがあります。豊葦原瑞穂の國も吾々の祖先の末り傳む以前は、色々の象群が次から次へと、勢力を競ひ支那に於ける軍閥の如くであつたであらう。

珍らしいデスモスチラスの化石

我日本と北米合衆國の西部沿岸即ち太平洋沿岸で中新世 MIOCENE、の地層の中なら、海に棲んで居た動物で、デスモスチラス DESMOSTYLUS、と云ふものゝ化石を發掘して居ます。此動物は古生物學上の問題となつて居りまするもので、分類學上の位置が判明して居りません。多分象類に極めて密接な共通の祖先から出たもので、一方は陸に、他方は海に分れて、適應變形したものではないかと考へられて居ります。そして此動物の化石は、全世界中只、日本と北米西部沿岸のみの産で他には見られません。吾々大和民族の太平洋沿岸發展等は地の利と天然自然の行方であつて、決して法則に反した行動ではないのであります。加州ではフレズノ郡が有名な産地で、日本内地には數ヶ所あります。

地層は中新世 MIOCENE, TAMBLOR-FORMATION, であります。

植物の化石其他

植物の化石も相當日本内地に見受けられます。併し

何と云つても米國や南米のやうには行きません。能登の國七尾灣近傍には有名な化石の森林があります。又福岡縣の北部海岸地方にも相當ある筈です。其他石炭の出る地方、即ち北海道夕張、磐城の國、前記福岡地方には石炭の上下の地層には、當時のシダ類や植物の化石があるのです。又岩手縣からは「カニ」の化石が出ます。栃木縣宇都宮の舊城に使つた城石の中には介殼を含んだ水成岩が澤山あるさうです。併し日本の化石は概して、新世代のものが多く、石炭層のもの以外は何れも新しいものばかりです。

活きた化石

生きて居る化石とは一寸変ですが、或る人々は斯様な言葉をよく使ふ事があります。夫れは原始的動植物で、現代に早や其姿をなくして終つた或種のものが偶然に、地方の極く小部分に何かの作用で生き残つて居る事があります。さう動植物を見附けた場合に「活きた化石」と云ふ様な事になるのですが我日本にもそれが一つあるのです。それは「銀杏樹」の一種でありまして、神社や佛閣等に好く見る大本であります。併し之は植物學上最も古い種属でありまして、ヨーロッパや米大陸等では最早見られない木であります。シベリヤの北方や北米のワシントン州、オレゴン州等では漸く化石となつた木や其葉を掘出しまして、皆相當世界の各地に繁つて居つたものであると云ふ證據となつて居ります。銀杏如きはいはゆる活きた化石の一種と申してよろしいのであります。(以下次號)

ポストン
文藝協會

葉月歌會詠草集



永瀬勇選

(順序不同)

クリスタル 川原八重

日本種の野菜など蒔きて我が夫は樂しみて居りこの明け暮れを。
迅く起きてこの清しさを味へと言ふがにきこの朝鳥の聲。

遠目には點とも見えし鳥の群れゆつたりと舞の居り近づき見れば。
軒先の桶にははられし水の面に月牙えざえと澄み静もれり。

デンバー 安井静女

朝まだき寝がめの床に物思ふ心もとなしフルツクの聲。

ホロホロと聲のさびしきフルツクよなれも一人し物を思ふか。

あめきたて、泣き度くしおぼゆ行きしまゝ夫は帰らず音をへもなく。
一日一日と日の経るをのみ樂しみぬよき日近付くと老いを忘れて。

ネブラスカ 赤星さと

まだきより出で、働くこの野良に渡る朝風さわやかかも。
まだきより畑にトメトを摘む吾れに朝餉を呼ばふ吾娘の聲きこゆ。
フホロギの聲のにはかに止みたるは草刈る音に怖じやしつらむ。
夫が手に培はれたるグラデオラス朱き花つけてま日にかバよふ。

北 林 静 江

外川氏をブラツクマネギヤーに推して。

待望の日はつひに未ぬ外川氏を吾等區民の長と今日はいただく。
クリークのほとりに立てばなつかしき吾が故里の磯の香ぞする。

鈴 木 緑 松

林焼く四條の黒煙ふとぶとと真直に立ちて青空を支ふ。
日の暑き凌ぐと寄りし青柳の下枝に鳴けり蟬ニつ三つ。
朝顔の蔓は棚より家根に伸び今を盛りと人目引くなり。
日盛を大赤蜂は蟬ひとつ捕らへ飛び来ぬ前庭の木に。

大 園 晴 子

道程はつねに変わね行き馴れぬ道の歩みは遠き思ひす。
人を捜す手立なるらむセイゲ原のをちこちにして上る煙は。

行方知れぬ人に示さむて焚く煙今日空しく立ち上る見ゆ。

島原潮風

炎天のま下行きつつ我が前を横切る蜥蜴のすばやさは見づ。

涼み臺に夕べ寄り来し人々等組閣にふれて話はずめる。(故國の組閣成る)

大空魁

砂原は灼け大照りつつ烈日の下にはろばろとあり路をはさみて。

山鏡きは日暮れてなほもつづくらし木々のひまより赤きほむら見ゆ。

陽をうけてひときは青き棉の木や葉かりに白き半開の花。

巖山の端中湧き立つ雲はいや白く夏の光に映えつつひろがる。

井谷千代

身も心も弱きを知れば何事にもひかへ目勝ちになるはせんなし。

はげしさうたまには有れど大方は冷めたき吾れや空虚心に。

蔓草はすがるもろく無く自づから絡み合ひつつ倒るを見たり。

宣誓の式嚴かに悲壯なる決意はひびく國歌の調べに。

貴家おま子

あまつ日や光あまねき地の上に國を戦ひて血を流しをり。

國のため今宵出で征く兵士らにまねらす言葉惑まどひにぶれり。

庭つたひ踏みゆく靴にさわさわと青芝の音の心地よきかな。

菓子の中や出でし辻に吾がもてる願ひことごとく叶ふとぞいづ。

児玉なを

夕立はつひに來たらず過ぎゆきて遠山の上に閃く稲妻。

教へ子の名もありて雄々しこの夕べ七十四人の子等召され征く。

征く先きは何地いづちか今宵發たつ子らの奇くしき運命さだめに遇へるぞあはれ。

インデアンバンドの奏でし曲と征く子らの引き締まりぬし面おもてあ忘れじ。

川口静洋

灼熱の陽を避けるがにオークラの花は葉蔭にのみ咲けり見ゆ。

拾ひ來てまだ月経つきへぬに靴の甘諸蔓青々と文餘のびたる。

睡蓮の圓ろき浮葉の下陰に緋色の金魚見えかくれつつ。

他人ひとの上をあげつらふ者の多き中に弟子の眞まことは身にしみにけり。

永瀬正臣

國民たみとして踏みまよはずやわれの道誠は神もしろしめすらむ。

收容所しやくじうしよに來て口にするとお思はざりし日本なすび花子を友は給ひぬ。

くだものを見れば思ほゆかりホルニヤの收穫どきの村の様など。

日二十九日に休あたりして散華せし勇士もありときくに雄々しも。

矢形溪山

今日はしも祖國の變のつたわりつまうらさびしもたそがれの旅舎に。

真帆片帆往き交ふ湖の水の面中吹き来る風はすでに秋かも。

停車場に巢をしもてれば怖ずるなく人間ちかく遊ぶ鳩の一と群。

永瀬 勇

唐胡麻の廣葉の面にはららぎて夕庭にうつ水音涼しも。

紙の耳長きをつけて女童等の鬼の遊戲餅つき餅つき。

春の夜道更けて帰れば風温るき間の奥處中河原とよもす。(春遣捨)

友の家を辞して出で立つ目の上につしか、り光る大さ夏雲。

後記

朝の間にはかに涼しく大変凌ぎ良くなり、もうそろそろ秋來を思はす感である。併し午後になるとまだ厳しい暑さが残つてゐて何うしてもクーラーの前を離れる事が出来ない。其れで今回の歌會も今一度、御迷惑とは知りながら川口

静洋先生のお宅でお世話に成る事にし、去る八月廿六日午後二時より会所に於て催した。次回からは矢張り従前通り廿七の七一Aを借して貰つて其處で催し度いと思つてゐる。お互ひに遠慮の要らぬ所の方がよいと思ふ。會後茶菓の響應を受けた事を特記して川口先生に、意を表す者である。當日集つた者約十名、今回は歌會始まつて以来いまだ曾て一度も缺席された事のない貴家さんの見えなかつたのは大変寂しかった。尤も前持つて缺席の通知を頂いてゐたから失望はしなかつた。失望どころではない、矢張り熱意のある人は斯うして数ならぬ愚生にまでも其缺席の通知を送られ、却て恐縮にも感じ又思慮深いお心に敬服もしてゐる次第である。若しや恙でもあられるのではないかと同日夜刻、丁度短歌誌高原第四號が来て居たのを届け傍々お訪ねしたのであつたが生憎お留守だつた。御健在なる事を祈つてゐる。他の集まつた歌友は皆元氣であつた。愈々燈下書に親しむの候もま近くなつて来た様だから、益々諸君の精進努力を望んで止まない者である。尚ほ矢形溪山氏から消息あり。愚生を通じて歌友諸君えよろしくと言つてありました。餘白を借りてお報らせして置きます。

*

*

*

萬葉別離及び旅情の歌

(萬葉集より)

ささの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹おもう別れ来ぬれば(柿本人麿)
淡路の野島が崎の濱風に妹が結びし紐吹きかへす。(全 前)

二人ゆけど行き過ぎかたき秋山をいかにか君が一人こえなむ。(大伴皇女)

家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎のよきにもる。(有間皇子)

何處にか舟はてすらむ安禮の崎こき廻み行き(高市黒人)
楓無し小舟。

若しくも降りくる雨か神の崎狭野のわたりに家もあらなくに。(長奥麿)

吾が命しまさきくあらば又も見む志賀の大津によする白浪。(穂積光)

島がくり吾がこぎくればともしかも大和へのぼる真熊野の船。(山部赤人)

遠妻のふりさけ見つつしぬぶらむ此の月の面に雲なたなびき。(詠人不知)

いで吾が駒早くゆきこそ待乳山まつらむ妹をゆきて早見む。(詠人不知)

※

※

永瀬生

選後隨錄

病める身を魂きはまる日まで家族が爲め心つくして逝ける君はも。

此の歌の意は、病氣の身でありながら其家族の爲に、死ぬる日まで心をつくしつゝ逝かれた君は誠に良く出来た事である。並々の人では逆も出来る事ではないもの、と言ふのであらう。大抵の場合病人は家人の世話になるものであるが、此の作では反對に家族が病人の世話にでもなつたかの様に詠まれてあり、其言ふ点にこの作に對して持つ感の錯覺が起るのではなからうか。併し事實は事實であるのだから其處はあまり穿つた見方をする方が間違ひになる譯である。其れで一應は作者の感じた事にも同感を持つてゐるのであるが何うも未だ強く讀者の胸を打つ感動には乏しいと思ふ。第四句目あたりに此の難があるのではなからうか、心つくしてがそれで、此處は作者本人には良く解つてゐる事なのであるが讀者の方から言はすれば、一寸想像困難である。如何なる様に心をつくしてか、いさゝか抽象的だと言へよう。此の邊をもう少し具象化させた表現を採られたら讀者も同じ様に作者の心持ちについて行けるのではないかと思ふ。

吾子二人み國のたてとなりけりひたむきに願ふ學も半ばに。

右の作まだ短歌と言ふところまで行つてゐないと思ふ。だから今更ら此處に云々するの何うかと思ふが、初心の人には良い参考になるのではないかと思はれたので愚見を述べて見る事にした。尤も既に前辨でも此れと良く似た事を言つたと思ふので聊か重複の感がせぬでもないが更に書いて見やう。先づ此作は、上三句と下二句とが別々の事を言つて有るのがいけないと思ふ。上三句迄は自分の子二人迄も此國のたてとなつたと大變雄々しい事を言はれてあるのであるが、其れが四、五句へ行つて一轉して、^{ひたむきに}願ふ學も半ばに、では全然意味を成さない事になつて仕舞ふ。この下二句、殊に下句の^{學も半ばに}がある為すうかり難解な作にして仕舞つたのである。思ふに作者の感の統一がとれてないうちに作する方を急いだが爲、斯様な失敗を招いたのであらう。一首は初めより終りまで一貫した、感動を以て成立しななければならぬ。と言ふ言葉を忘れない様に、此作者はまだ初心の方なのだらうから、段々と修練を積んで行くに従つて斯様な失敗は重ねなくなる事と思ふ。

いささかの事に疲れてなす無きをわびしみ思ふも久しかりける。

此作者には最近著しい進歩の跡が見えるので、心ひそかに喜んでゐる次第である。尚ほ氏の作品に付いてはもう吾々のつまらぬ筆を加へる必要もない様に思ふてゐる。さて右の歌、いさゝかの事にも疲れて爲る事の無いのをわびしみ思ふのも既に久しい事である事よ。と言ふのが其の意であるのだらうが、どうも未だはつきりと作者の心持が自分には汲み取れない憾みがあるので此處に取上げて見た。三句以下に歌意の不明瞭と言ふ難があるのではなからうか。可なすなきを、は此場合、可すべなきを、と言ふ様な心持を表はしたかつたのではあるまいか。つまりいさゝかの事にも容易く^{たやすく}疲れる自分の身をいたはり思ふ心から其のすべなきを嘆きわびしく思ふ。と言ふのが眞の心ではなかつたのか。其うぢふ風に詠んで始めて「わびしく思ふも」と言ふ句も生きて来ると思ふ。下句の「久しかりけり」と言ふ長い時間の含まれてる言ひ方はこの一首の上には必然性が無い様に思はれる。若し前述の如く自分の身をいたはり思ふての作であるならば失禮ではあるが、「いさゝかの事にも易く^{やすく}疲る身は爲すにすべなき思ひわびしも。」と言ふ風な表現でも採られたらどうであらう。あまり穿ち過ぎた見方に終つただらうか。(終) 九一記 盲評多謝



ストログハートの手紙

と作者アレイン・グリーン

翠川 敏

序

『LETTERS TO STRONGHEART』は 米國の好事家の仲間でも多く讀まれる本の一つである。

ストログハートは 著者の愛犬で今は天國にゐる。

折に觸れ あの世に手紙を書く。それが千通にも上つたと言ふ。乞はれて一冊に纏め出版したりが此の本なのだ。時評あり ローマンスも浮んでゐる。著者と會つたこともあるし 中に 日本の日光 京都 瀬戸内海から送つた手紙も三通あるの下 作品を繞つて 感想を書いて見る氣になつた。

末尾に京都からの手紙を載せたが 實は原本が手元にないので記憶するまゝに意味を譯したに過ぎなかつた。グリーンの文は 非常にこつた物と言はれ恰も芭蕉の俳文を英譯するやうな仕事なので 持合せてないことが幸であつたと思つてゐる。

アレイン・グリーンは未だ獨身である。聖林のフランクリン街が 聴て行き話

らゝとする邊り 羅布日本領事官邸のあつた所と 餘り遠くない山莊に 今迄
あの世の 愛犬ストロングハートの靈を縋めて 恍しくも住んでゐる。

あの世う
瘦犬ストロ
ングハートの
靈を秘めて
悠しくも住
んでゐる。

先づ ブーンとストロングハートを知らない人の爲に紹介しておかなければならない。

曾て 故人のダグラス・フエヤーバンクスは、[『]八十分で世界一周[』]と題した映画を發表した。聖林を振出しに、桑港で龍田丸に乗船し、日本へ向つた。日本から、支那、馬來、ビルマ、印度、イランを経て、イラクのバグダッドから、無聲時代の傑作『バグダッドの盜賊』のトリックに使用したマジックカーペット（魔法の絨毯）に乗つて、歐洲、大西洋、米國大陸を一足飛びに聖林へ歸るまでの見聞を撮り入れた映画であつた。觀た人は、あのカーペットに三人の男が乗つてゐた事を記憶するに相違ない。フエヤーバンクスと監督のウヰクターフレーミングの他に、今一人、乞はるゝまゝに同行したブーンが乗つてゐた。ストロングハートは、ジヤーマン・シェファード・ポリスドッグであつた。

第一次世界大戰に當つては、天晴れ祖國の危機に馳せ参じた勇士で、時の獨
帝カイザーから鉄十字章を賜つた勲記の持主であつた。大戰が終結して、米國
人ブーンと一緒になつたまでの経緯いきさつや、伯林ケンネル俱樂部に連綿として認め
てある系圖とに關して、著者が直接に語つた談もあるが、茲では省略して、由ゆい
緒ちある長い稱號を具へるペティグリーであつたことだけを一言しておこう。

戰場から歸還した勇士が、全て而うであるやうに、聖林へ連れて來られた當座、ストロングハートの心は麻のやうに乱れてゐた。況してや俗に言ふワシ

マンドッグであり 死すとも二君に仕へずのペティグライであつたが故に 両者の間には氷炭相容れない何物かがあつて 蟠^{わだかま}りを解消するまでには 昔の敵國人ブーンも可成り手古摺つたものらしい。

恰度 サイレント映画が行く所まで行つて 製作者達は何れかへの新機軸を見出さうと焦つてゐた時であつた。エナイテッド・アーチスト會社のブレイシントラストに算へられてゐたブーンが それは 偶然の動機から ゴールドウオンの懇望で映画に出演させるやうになつたのである。後にリンチンチンを始め多くのスターが登場したけれども 犬も一役買つて主演する映画の製作は 要するにストロングハートの處女作『サイレントコール』が先鞭^{せんぺん}を着けたのであつて これは畢竟 だれ氣味であつた映画界に新しい分野を開拓させることゝもなつた。

立派な顔^{かんばせ} 物凄^{ものすご}いほど美しかつた軀^{からだ} それが繪^えのやうにスクリーンへ映つた。氣品ある容姿が賜物^{ごふと}となつて 矢継ぎ早^{びや}に製作は急がれた。凡そ 生物の原動力には際限があるものらしい。賣れつ子の玉座を占めるスターには速くも嚴肅な死が訪れたのである。戦時の活動が際限の度を超えて居たのが因^{もと}であつた。『全盛を極め 人氣の絶頂に立ち 惜しむ者を後に 一步早く去る人間は 最も恵まれた幸運児である』とは 若くして逝つた不朽な映画俳優 ヴァレンチノの墓石に刻まれた言葉であるが それを そのまゝ 短命であつたストロングハートの靈に捧げる錢^{はなむけ}ともなつたであらう。

アレイン・ブーンは 決して客觀的に物を視ない。第三者の立場から検討す

る人間である。物された作品は第四者の考察と化してゐる。撮影所にあつてストロングハートを動かした力は監督から発生したものではなく監督に憑かれたブーイングの息の作用であつた。と同時にその瞬間總ては擬視するであらう観衆の心の裏にまで透視されて居たのであつたことを今にして思ふ。

この世に『I & O - IN OZON』と呼ばれる存在を見受ける。ブーイングとストロングハートを通じてゐた一脈は今も尚繋がれてゐると言ふ。だからブーイングの手紙は全て『あの世のストロングハートよ』と書き始められてゐるが『左様奈良』とは結ばれてゐない。聖林の山荘には在りし日そのまゝに生活の跡が遺されてあつて『I & O - IN OZON』の片割れはその蔭の中から第四者の立場で世の移りを静かに眺めてゐる。今も而うであらう——。

『八十分で世界一周』の旅から手紙を書いた。日本で認めたものは日光京都瀬や内海からの三通である。京都で認めた手紙の一端を紹介して此の文を結ぶことにしやう。

親愛なるストロングハートよ——あの世の——

自分は今京都と言ふ所に来てゐる。日本の京都は千年の夢を包んで繪のやうに美しい。こゝへ来たのは由緒ある神社や古刹を訪れんが故であつた。

實は今日岡崎と言ふ公園に行つた時お前の同族の者と回遊したので東洋のお前の友人達は一体どんな生活を送つてゐるかを知らうと思つて行

勤を共にしてみたのである。

日本と言ふ國は世智辛い所らしく、悠々と街道を歩かない。愚圖々々してゐると子供が石を投げるからである。

お前の友人は宿無しらしくかつた。人間社會の不況が影響すると見えて、その日の糧を得ることすら至難らしい。行手は八方塞りだ。然し、彼も闘士生きて行かなければならない。瘦れてはゐるが、眼光は炯々として周圍に配られてゐることを見ても唯ものでないのが判つた。

何時かは自己の行手を切り開いて安泰を計るに相違ない。

お前と共に、この世に生を享けた者が當然占めるであらう前途の幸運を祈らうではないか――

また會ふ日まで

京都にて

アレーン・ブーンは、クリスチャン、サイエンティスト、米國では珍しい型の作家である。東洋式に表現せば悟道に入つた人物とでも言ふたらば、性格の片鱗が窺はれるであらう。

若し、現存の人類が、今少し、第四者の立場から、世の移りを考察することが出来たらば、醜い人類の相刻も解消されるであらうと、思惟するものゝやうである。

『京都よりの手紙を認めた時の日本は、関東震災の餘燼未だ消えず、國民は四面楚歌を聞き乍ら、宿無しの犬が當めるやうな、苦難に喘いで居た頃であつた。』(終)

ユジータポレ

ヒラ轉住所

ロイ・タザワ

(48)

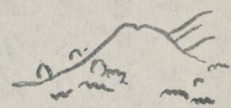
一年三ヶ月目に再びヒラを訪れた。同行はハリス博士・ロウレー博士・エム・ピー駐在所に着いたのは陽盛りの午後一時半。検査訊問なか／＼嚴重を極め、充分調べた上、更にメイン・オフィスに電話で照會、OKとなる。追約四十分立往生、ポストンの有力官吏と一緒に来てさへこれだからエバキューイばかりで訪問したら、どんなに面倒だろうかと考へる。兎もあれ同じ轉住局の傘下にあつてもセンチ毎に異つた色が濃厚に現はれて居る。一端許可となつたら後は簡單、一走りに直線道路を走つてセンチに入る。赤い屋根に白壁のバラックが生ひ繁つたキヤスタ・ビンズの隙間から處々顔を出して居る。行き過ぎる人もトラックも変りなく、若い人の世界が年老りの時代へと移り変りつゝあるのが窺はれる。センチの一番奥に鎮座するアド・ビルに入り、直にテリー・辯護士のドアを叩く。待ち兼ねて居た同氏は一行を招じ入れ、一切の訪問客を断つて我々との會談に入つた。一年前ハウス・ビル百八十七を撓つてのアリゾナの排日氣勢に對し、堂々正論を以つて矢面に立つただけ、テリー氏は仲々の利き者といふ感銘が深い。可成り微に入り細に亘つた立論でいやが應でも押さうとするフツシング・パワー、味方にしたら頼もしいが敵にまわしたらうるさいに違ひない男ぢやあるまいかと氣をまわす。ヒラにテリーあり」として住民の信

望を集めて居る噂も萬更でなく、何くれとなく住民の相談相手となつて犀利な判断を提供して居るものゝ様である。日ざしが斜になつた頃、友人Iのアップルトに辿りつく。砂原にポツンと立つて居たブラツクがスツカリ綠葉に掩はれて居るので戸惑ひ數分、夫人の聲で安心して中に入る。ヒラもよくなつた。

ブラツクの構成は大同小異だが、ブラツクとバラツク、又ブラツクとブラツクとの間がポストン程駁々廣くない様だ。それだけ近隣の人と親しめる雰圍氣を形作つて居るものゝ様である。芝生にころがる人、ステツプベンチに憩ふ人、庭の南國風景は團樂そのものだ。四方山話に打興じる人々の中に入つて耳を傾ければ断片的乍らヒラの史跡が走馬燈のやうに繰りひろげられて行く。

何處も同じ様に轉住當初に氣勢を擧げたのは悲憤慷慨派で、昨年初度の志願兵應募に際しては可成りの悲喜劇があつたらしい。志願したばかりに好いた好かれた兩人が破局になつたり、祖國に殉ぜんとする息子ゝ爲に世間をはばかり母親、ブラツクから送る兵隊に對し日本人米國人の區切りを立てやうとした頑固者、義利人情を滅却して武士道はないと涙を流して日本精神を説いた男——現在ではキヤンプの生活も外觀の整ふと同じやうにおちつきを得て来たが、それと共に轉住ポリシーが漸く力が加はり二世から一世への轉換を見せて居る。ニユウジャシーのシーブルツク・フアーム等は燎原の火のやうな勢でキヤンプ内にひろがって居り、此處彼處のメス・ホールで報告會だの懇談會だのが毎夜行はれて居る由、戦後問題、それにつながらりを作らうとする眞鍮さが蠢めいて来た事は争へない事實のやうだ。

(終)



隨想

鉢の花

石川凡才

海拔四千呎の高原―春とは去へ未だ寒いく―あの頃から手塩にかけて育てた一鉢の松葉牡丹が、今日麗かな陽を浴びて見事に咲いた。八重咲に。此花の原地を探れば言語に絶するあの立退き當時が蘇る。サンタアニタ集合所に於ける競馬場の庭一面に咲誇った松葉牡丹が、同胞と共に移動をして、ローワ、ジロームへの長旅。そして夏来る毎に同胞を慰め、隔離と共に當センター入りをしたのがこの花の由来である。

この只一鉢として一輪の花に佇てば連想も盡きず。この種を蒔いた頃は寒かった事、霜の降りさうな晩には必ず室内に入れてやった事等々を想ひ起してゐると、想は太平洋を越えて故里に走る。我が家の庭にもこの松葉牡丹があつて年々綺麗な花を見せてくれた。そしてその花を数へて楽しんで少年時、庭にあつた置石の形までが蘇る。あの置石は今日も

あつ儘だらうか。萬年青はドウであらう。霧島の大木は今も見事な花を
付ゆらだらうか。五葉松は、そして僕の植えた紅葉は枯れはすまいか等
の連想は何時までも盡きさうにない。

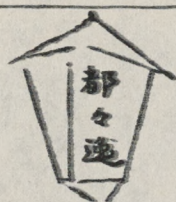
さなきだに帰國を希望して、鐵柵の中に收容されてゐる身には夜毎の夢
に古里が、祖國が浮かぶつた。

交換船の何時の日に出るのやう、早く祖國の土を踏みたい。祖國の爲
にか一杯働きたい。

そして私が懷しき我が家の庭に停つた時、この隔離收容所の庭に咲い
た一輪の松葉牡丹を想起す事であらう。

それから鐵柵の中の隔離館府と、マウント・シヤスターの白雪とを。

一九四四、八、一、(終)



○持つも持たぬも配所は同じ 家族揃つて貰ひ飯。

○一人残した故郷の母へ 無事で逢ふ瀬を待つ平和。 谷本晚香

○暑い砂漠も長居となりて 何時か咲き出た戀の花。



ポストンを出でよ

矢形溪山

ポストン滞在中の皆様、御交誼を感謝いたします。シカゴにまでから御伺ひ洩れのお方もあるかと存じまして、乍失禮此拙文を文藝誌に載せていたゞいて通信に代へる事をお赦し下さいませ。

*

*

一生の長さに比べてポストンの二ヶ月は極めて短い時間ではあつた。にも拘らずかうした多勢の知友を得て而もそれが一人々々莫逆の友に近い事を考へると轉住所の生活に依つて私は何と言ふ大きな精神的財産を作らせて貰つた事でせうか。

六月廿七日タメスホールでつらい涙

のお別れをしてリーブオフィスで寫眞のついた證明書に、現金廿四弗也を途中の小使として貰つてドアを排すればツラツク迄の途上に握手の手が林のやうに差しのべられる。いつの時か又の逢ふ瀬を契つて固く結ばれる手には涙が伴ふ。

ツラツクは走る。見送りの人の影がうすくなつてゐるのに、まだ二三の友の帽子をかつてゐて下さるのに強い感情の刺戟を受けて遂にポストンは見えなくなつた。

ポストンの友にすまなく背を向け。

パーカーの停車場の真向ふには、ゲヤツプス・キープアウトのサインがある。神妙にブラット・フォーラムで瀟車が来るまで待った。ポストンより烈しい暑さであつたが、此處にある氷水で一同は蘇生の思ひをした。

驛の人、附添の役人も何くれとなく

親切で吾々の荷物も一々一纏めにして積んである。定量を越えた荷物も運賃の不足税を全然取られなかった。廿日シカゴに着いてからも停車場の荷物係りは汗を流して吾々の荷物を探してくれた。二つながら有難味を感じると同時に、ポストンの方ではよい感じを興へなかつた荷物係りの態度を思ひ比べずには居られなかつた。

午後十時十分瀛車が入つて、四十五分出發、やつと瀛車の窓から涼しい風が入る。暫くしてコロラド河の鉄橋にかゝる。胸を裂かれる思ひでこの加州の境を越えた二ヶ月前の五月廿七日を思ひ浮でなかつたものは唯一人もなかつたであらう。瀛車の中で吾々は幸にチェヤ一つづみに陣取つて、興奮の後の眠りに陥つた。と突然に、ポストンが見える。と揺ぶり起されて見れば、左方遙かに第一、第二、第

三と大きな市街を望むが如くに電燈の灯りは上空を照して吾等のポストンがはつきり見える。／＼の友、家族を残して去り行かんとするものゝ心に再び込み渡る名残である。翌朝醒むれば清楚な小停車場に着いておる。

横に寝お堅にまどろむ高原の。

汽車の窓より朝風の清し。

やがて連山を征して上れば針葉樹もて覆ひたる山の間にカクタスや花白く真盛りなり。

山々の一つ々々を極め行く

汽車にポストンの遠ざかるは悲し。

晝過ぎ頃より松柏處々に見えて名もなき野花一面に廣がり一室日本人のみの旅窓にいと樂しき眺めなり。

日本人ばかりの汽車に窓青し。

又、

初夏の訪れにしか人足り。

綿なる里も花ざかりなり。

など一人よがりの作にも旅情の二人を慰むるには充分であつた。

一度アリゾナに入りし汽車は再び加州に入りしと聞きて、

ひた走る汽車の窓より稍々圓む

山は繁りて加州かと思ふ。

高原は青み渡りておちこちに

霸王樹のかげに牧羊總へり。

午後一時アリゾナ州ウイリアムに達す。此あたり汽車は羊腸たる溪谷を走りて仰げば、老松山々を蔽ひ間道其間を縫ひて故山の景色を偲ばしむるものあり。ピロリもなくチヤヤに眠りて頭角を催せし身も、佐野、田中さんの心遣ひの輯當を、笠井氏よりの記念のアイロシ・ツリーの箸にて心地よく腹に收め元氣回復す。

二日目もまたアリゾナの汽車の窓。

流石にアリゾナ州は廣い。

廿八日午後三時頃なりしかニューメキシコのギョツプに着す。右先山を眺め左青々とした丘を眺めつゝラグナ邊より黄昏れをむ。何の營みをするや數十のへハウスの村落あり。

右山の麓のアトベの建ち並ぶ

インデアンビレダに歴史を偲ぶ。

ニューメキシコのアルバカークにて十五分間停車す。廣莊なる建築なり。多くの人下車して買物をなす。インデアンの文数多手藝品を賣るためにプラットフォームに立ち並べるを見る。遙か左方には高く木オンの灯輝きて二ヶ年振りに娑婆に出でし事を意識す。風荒れて窓をしめたれども暑さを感じず。夜半より稍冷え渡る。

廿九日未明より洗面所は込み合ひて一時間餘も待たさる。数人を外に待たせおきて三十分以上を洗面のみに費す人あるは苦々しい。かねて白人の団体

と流車旅行せし時に一白人が洗面所を用ひし後丁寧拭き清めて次の人に譲るのを見て殊更に尊敬の念を深めたることある自分は、今日日本人青年諸君と行を共にして其粗雑と不潔のまゝおき去る人の多きを省みて、自ら同胞の行為に恥ずる處多きものを感ず。二世の罪なると共に一世の責任たるを思へばなり。小雨ありし後の山々は濃霧に閉されて沿道の谷川の流れ急なり。

深緑したる丘を朝霧の

とざして流るゝ谷川の水。

朝八時コロラド州ラフンタにつく。

此處にてデンヴァー行の人は下車して他の車に移る。車中にサンドウィッチ、ミルクなど賣りに来る。二輛後にダイニング、カーあれども日本人の行くもの少し。廿五分間の停車。一人のMP君カーキーに棍棒のいでたちにて一通り流車の中を御検査なさる。場内のカネ

よりコーヒーを買ふ人多し。

すれ違ふ流車は兵馬の窓。

此處より曠野千里農家は点々として散在し居れども尚幾萬の移民を容れて餘裕あるを想ひて世をあげて戦に身を曝す代りに何か轉運の道のなきものにやと考へて見る。流車の進むにつれて沃野更に加はり馬、牛、羊の牧場相次ぎ、名にしおふコロラド州をうなづかしむ。田舎の小停車場に止ればキャンデーを賣りに来る。一青年「ノー・ビヤ？」と問ふ聲に一同どつと笑ひぬ。

今日午前十一時キャンサス州に入る。

晝食の時糠漬、味噌漬など香の物のために微となりしはいとおしい。握飯は廿四時間以上を保たず。午後キャンサス州ダツチ・シティーを過ぎて、黄金色の麥畑幾千英町展開して眼を癒るものなし。曾て活動寫真にて見しホイートの收穫を實地に見物せり。路邊はアザミ

クサギナ等繁茂して珍らし。又間道を
一頭牽きのボギーに打乗りて走る女あ
るを見て心は半世紀の昔に戻りいと長
閑なり。午後三時。五分ハツチンソン
着。外觀加州サクラメント位の町なり。
街路樹繁茂して美観を呈し郊外は尚黄
金色の曠野茫漠として續く。陽脚弱け
れども汽車の止まる時蒸し暑き事甚し。

青葉しげるへちに圍まれすくくと

コンは伸びたりカンサスの里。

廿九日夜九時十五分キャンサス・シテ
に着。名にしおふシカゴ以西第一を誇
る都市なれば一時間を利用して下車す
る人多し。夜行中前列車に故障ありし
爲此汽車も遅刻二時間、シカゴ着は明
十時半なりと聞く。

三日目の荒野の旅にたそがれて

明日着くとおふシカゴ遠しも。

廿日未明より身仕度をなして明くる
を待てば軌道の両側は目さむるばかり

の新緑、水清き湖上には小蒸気の通ふ
ありて正に一幅の画なり。シカゴ停車
場につきて下車人の半ばは兵である。

その中に交りて出で行く吾々の心は不
安に蔽はれて両側に立ち並ぶ大衆に目
をふしつゝ歩み行けば嬉しくも二青年
の出迎を受け地獄の中に倅を見出せし
心地す。タフシーに飛び込みて直ちに
假の宿に急ぐ。シカゴの空は曇りて暗
く街は古びたれども高樓立ち並ぶ有様
何となくフリスコを偲ばしむるものあ
りて親しみの中に疲れの軋を脱ぎぬ。
遙に西方ポストン知友諸子の健康を
祈りてシカゴ第一信を認め終る。(終)

六月三十日夜

シカゴ客舎にて

附記

此行で氣附いた事は携帶の荷物はな
るべく少くして、後日WRAの手によ
つて送らるゝを最上の策と思ふ。

時事所感

松原信雄

轉任所といふ特殊社會に於ける我々の協同生活は、多くの人々の豫期に反して意外にも永く、既にニヶ年有餘の歳月を閲した。この間唯彼の十一月事件を外にしては、全体として極めて平穩な生活を續けてきたといふ事を我々は喜びとしたい。最初此處へ来た當時轉任所生活が何年も續かうと思つてゐた人は少かつたであらう。國家と國家とがその運命を賭して血みどろの戦ひをやつてゐるのだ。毎日毎時、前途に對する大きな希望に燃えてゐた若人が、國家の爲にその尊い生命を捧げてくれてゐるのだ。それを思へば少々の不自由は何でもない。大に頑張つて戦後には亦新しい生活を切開いて發展するのだ。と揚言してゐた人達もいつの間にか此處からその姿を消してしまつた。

砂を噛むやうな味氣ない不具な生活に漸く倦怠を感じてきたと同時に、國家が總力を擧げて戦争を遂行しなければならぬ戦時國策の線に副つて、WRAが「再轉任政策」に全力を傾け、無期限出所¹或は「季節労働²」にて、戦時産業戦線に我々を誘引し、その生産増強の呼びかけに應

じて出所してゆくエバキュー（轉住者）は日と共に増加し、所内人口は約三分の二に漸減した。そして最近になつて加州への帰還といふことが決定性を帯びて、我々の前に現はれてきた。若し加州がオープンしたる、更に所内の人口は減少して轉住所はマイヤー局長が云つたやうに、
 『養老院兼育兒園』に頼した社會となるのではなからうか。

我々にはたとへ所外へ出るにせよ、或は所内に止まるにせよ、最も肝要なことは戦時であるとかふ認識である。從來がさうであつたやうに、今後其幾多の試練が我々の前途に横たへられるであらう。だが世界各國民が等しく大きな苦難に直面してそれを克服しつゝあるといふことに想ひを到さうではないか。我々には既に難局に對處してゆく覺悟はできてゐる筈である。死を覺悟した時始めて戦場の兵士が勇敢に戦ひ、奇蹟的な手柄をすら立てることが出来るやうに、我々も確固たる信念と大きな心構えさへあれば、どんな苦難が押し寄せて来やうとも、それが我々の生命に一層美しい光彩を添へる大きな試練として、狼狽することなく怖れることなく敢然としてそれを突破してゆく力が自ら湧出してくるのであり、その進路について迷ふやうなことがないのである。

○ポストン風景

『

日頃尊敬してゐる貴方のやうな立派な先輩が、あの重任を引受けて下さつた事は何より嬉しい事です。』 いやそ

の御言葉は誠に痛み入りますね。住みよい社會とするのも、住み難い嫌な社會

とするのも、結局お互日本人の責任な事ですから、例へ嫌な仕事でも自分に振

當られた以上、僕は最善を盡したいと思ひます。併し僕がどれ丈努力したとて、

一人では何も出来ません。立派な協力者を得て始めて僕の職責を全うする事が

できるのです。そこでこの方には経験の深い貴君に是非入つて頂いて御協力を

願ひ度ひです。』 』 どうも恐れ入ります。實は私は御承知のやうに供給部の方

の責任を受持つてゐまして、今年の冬はどの部落の人道にも——を充分に配

給して、困る事がないやうにしたいと思ひまして、色々と計劃を立て、漸く此

分なれば自分の望みが達せられると喜んでゐる處なのですから。』 』 若い貴君の

その立派な御精神は誠に感服の至りです。ですが供給部の方は誰か他の適當な

後任者に御依頼する事にして、是非この方へ入つて奉仕して頂きたひのです。

之もポストンの為なのですからどうか引受けて下さい。』 さうですか。ポスト

ンの為になる仕事なれば、私は喜んで何でもさして頂きます。』 かうした立派な

人達がポストンに在るといふ事は何といふ嬉しい事だらう。二人の會話を傍で

きいてゐた自分は急に明るい氣持になつた。その傍で若いタイピストは一心不

乱にパチパチとタイプライターをたゞいてゐた。

ポストン風景

(2)

『ふうん、代表者の選挙か、成程、今度はどんな新しい人が現れるかのう。』と『ポストン新報』を読んでゐた男が傍の男に話しかけた。『みんなは真面目に考へていゝ人を選んで欲しいものだ。』とその男は答へた。この話を聴いてゐた第三人目の男が口を開いて、『代表者、ふうん、今度も亦〇〇が出るだらうか。あんな男に大政治家面して威張られてはポストンの日本人の耻辱だよ。ポストンでは本當によく出来る立派な人物は賢いから引込んでゐて何もやらない。だからあんな話らない奴が秋物顔にのさばり出て恥を曝すんだよ。』と罵った。『そんな間違つた考へを持つてゐるからいけない。あの人程同胞社會の爲によく働いてくれる人は少いよ。何でも他よりはよく出来るのに、引込んでゐてポストンの爲には何一つしないやうな者を立派な人物とは云へない。寧ろ出来ない人よりは悪い唾棄すべき利己主義者だ。戦時であるといふ事をよく自覺して、みんなが『職域奉公』(I DO MY PART)といふ立派な信念に燃えて、各自が夫々の技能を最高度に發揮してゐるのが現在の世界ではないか。自分に出来る丈の事をやらして貰はうといふ奉仕の精神で一生懸命働いてくれる人こそ、誰よりも尊いのだ。人間だもの缺點もあらうし、間違もやるだらう。その缺點を補ふ、誤りを繰返さぬ様にと協力してこそ、日本人ばかりのポストンはツラゲルのない任みよい社會となるのだ。』と前の男が反駁した。傍の柳は夕の風にやすぶられて静かに揺れて居た。

隨一本の紐

外川明

それ程老人でもないのに、今日も脚の三里に點火してゐる古風な彼である。そして毎月、月の始めには必ずかうして點灸するのが、長い間の彼の習慣である。彼が何故に點灸し、如何にして灸の信者となつたかに就ては、可成り長い来歴があるが、私が彼の點灸のポーズからペンを起したのは、彼の點灸に就て書かうと云ふのではなく、彼の手指し指と親指とにつまゝれてゐる一本の白い木綿の紐に就て書きたいからである。收容所生活も九二年半近くにもなつた今日、日本製の線香など、お

寺へでもお詣りしなれば容易に見る事も出来なくて、到底點灸の役になど立ちさうもないが、餘り多くの人が氣附かずにゐる白い木綿の太紐（英語で云ふサック・ツワイン）の先に火を點けて、線香の代りに使ひながら、紐一本が馬鹿にならないではないか、かうして使へば数本の線香の代用にもなり、キープしておいても折れる心配もなく、使ふのにも却つて線香よりは自由自在になり、こんな重寶な物はない」と獨り悦に入つてゐる彼であるからである。さう云はれて見ると、彼のポケットには何時も一尋位の長さの紐が一本入れてあつて、必要に應じて何時でもスル／＼と引張り出されるのである。或る時はこんなこともあつた。血洗ひをしてゐる青年が指を切つて、滴り

落ちる血の始末に困つてゐた時、彼は素速くポケットから紐を取り出して、

「おい、かうするもんだ」と云ひながら、

ギリギリツとその青年の指の根本に固く巻きつけ、血管内の血液の流動を一時止めておいて、それからゆつくりと藥を塗りつけ、包帯をしてやつて

「どうだ、これでオーライだらう。あ

んなと肩を叩いてニツコリ笑へば、傍

で見てゐた年増女が感心して、「真實く

ね、用意の良い人は違ひますね、千刻

持つて一刻の用を爲すとはかう云ふこ

とでせう」と早速彼の得意の紐一本の

所持に共鳴してしまつたのであつた。

まあ五月蠅と思はずに、彼の一本の

紐に就ての御説教を聴いて見ることで

す。「成程なあ」と肯けることがありま

すよ。「たつた一本の紐です。ポケット

に入れても、少しも邪魔にはならず、

外から見てもポケットの形に何の変わり

もないが、その一本の紐が、何時、何

處で、どれだけ多くの役に立つかと云

ふことです。下駄の鼻緒の切れた時、

靴紐が突然切れた時、懐中時計の鎖を

失つた時、袋の口を閉る時、一寸何か

束ねたい時、その他思ひ掛けない時に、

この紐一本がなか／＼役に立つもので

すよ。」と彼はなか／＼雄辯になつて来

る。そして「本當にね」と合槌を打て

ば、「だかね」と彼は云ひながら、又話

續けるのである。「紐がこんな役に立

つからと云つて、餘り態張つて澤山の

紐をポケットに入れておいたなら、ポ

ケットがふくれて見つてもないし、又

もつれてしまつて、急用の間には合は

ないから、たつた一本だけを、常に持

つてゐることが大切でず。それも誰にも氣附かれないやうにね。そしてもう一つ大切なことは、物質的の紐一本と一緒に、精神的の無形の紐をも一本、常に心のボケツトに藏つておくことだ。そして心に不平や不満の起きた時、又廣に障つてたまらない時、堪忍袋の口をギユツと固く引締めるのです。と彼の紐禮讃は大したものである。

で私も彼の紐禮讃に引き込まれて、紐と云ふ字を辞書で引いて見る。と何でもないやうな字でも、辞書には次の如く書いてある。『紐(名)物を束ね、物を繋ぐ、太き絲又は細き革。ひぼ、紐鏡、紐刀、紐付、紐解、等々の文字が現れて来て面白く感じた。ひぼと云ふ俗語も久し振りである。紐解と言ふ言葉に、七歳の幼時の記憶など甦つて

来て、紐と云ふ字が益々懐しくなつて来た。それにしてもニユーヨーク市を紐育市と書き初めたのは誰で、如何なる意味があるものであらうか。識者の説明を訊きたいものである。ついでに萬葉集を開いて見たら、作者年代不明の部に、紐の字を用ひた歌に面白いのがあつたから、その中の三首を左に記して、餘りお説教じみた彼氏の紐禮讃の言葉に、少しく文藝的の艶と色彩を附加へ、そしてこの稿のペンを擱くことにする。

二人して結びし紐を一人して

吾は解き見じ直に逢ふまでは。

高麗錦紐解き交し天人の

妻問ふ夕ぞ吾も思はむ。(七ク)

人妻に言ふは誰が言さ夜の

この紐解けと言ふは誰が言。

(終)



結婚と生活

(人形の家) 讀後感

北村利恵

結婚を簡単な数式に還元すれば、一
と一が合して二となる代りに新たななる
一となることである。そしてこの不可
思議な過程に何より必要となるのは個性
の融和であり、さう旨く行かない場合
はその犠牲に終るのだから、結婚後のお
滅に於ては、自意識の發達した近代の
人程苦しい譯であり、同じ理由から自
己を見出した、いはゆる目ざめた婦人達は
其進歩のために、昔の婦人達の知らなかつた
複雑な苦痛を嘗めなければならなかつた。
イブセンが劃期的な近代劇にとりあげ
た主題はそれであつたが、その日もす
でに半世紀の過去のことになつた。

もし現代の若い夫人で、ノラが最後
に夫に向つて云つたやうな理窟が一つ
でも云へる婦人であつたならば、秘密
で借つたことや、その方法に幾らかの
手落ちがあつたにもせよ、要するに夫
のためにした借金にあれば大騒ぎす
るであらうか。むしろ現代のノラは一
切の顛末を夫に告白するに相違ない。
それだけの聰明と理智を働かすであら
う。さうしてその協力で援助を朗らか
に乞ふであらうし、夫にしてもそんな
ことを何故黙つてゐた位の短い小言で
早速善後策に取りかゝるであらう。
不幸にしてさう旨く事が運ばなかつ
た場合は、行為の底にあつた愛情が先
づ無視され、彼女のひととしての、専ら
しての、また母親としての権能と地位
をくつがへすまでの苛酷と無情で取扱
はれた上でなければ、ノラのやうな行
爲にでないであらう。

愛と憎しみは雙生児である。愛すればこそ憎むのであり憎むほどの思ひがあつて初めて愛するのでから、丈と妻との縛れはいかに激しかうとも愛慾が中心となる場合は、問題の性質はむしろ單純であるが、これに反して愛慾以外の要素が加はる時一殷怖ろしい地獄が口を開く。ノラはこの裂目にまつ先に落ちた一人と云つてよいと思ふ。

論ずれば際限のない問題である。兎に角實社會から隔てられた特異の生活圈内にある今の我等に適應しない問題なのかもわからないが、焦躁と無聊の境地を脱却するの意味に於ても斯うした名作を一讀するのは無駄ではないと思ふ。

(終)

女あり

あがひつげに背かじと心を碎く
見ればかなしも。

(石川啄木)

Compliments
from

NATIONAL GROCERY CO
MESA, ARIZ.

whole salers
Quality Grocers

ポストン文藝川

柳

島原潮風選

古川柳句解

△筆法の外に一流ふるひ出し。

句解 菅原道真公は大儒者で、特に筆法は一流の達人として世に聞えてゐるが、この筆法の外に一流震つて天下を驚かしたものがあつた。それはいふ迄もなく、雷電となつて時平を震死させたことをおふのである。(謡曲其他) に基いて筆を揮ふの揮ふに雷が震ふの震ふを懸けて「一流ふるひ出し」と柳化した句。

△行平は五風十雨にやせがつき。

句解 在原行平は光行天皇の逆鱗に遇ふて、攝州須磨の浦に流罪の身となつた。彼は謫居の徒然に住みわびて居るうち、松風村雨とおふ姉妹の汐汲女と懇意になつた。姉妹は稀に見る美人で由緒ある者らしいので、終に相愛の仲となり、配所の徒前を慰め、憂愁をも忘れ得たのである。さて行平は両



女の愛に耽った結果、からだに瘦せが見える程になった。

附説 行平は阿保親王の第二子で、在原の性を賜った二人の一人なり。嘗て同族中遺恨のある人が光孝帝にお勧め申した結果、行平に大鷹鳥の鷹飼の役を命ぜられた。行平は之を恥辱とし、「公翁さび人などがめぞ狩衣けふばかりとて田鵲もなくなる。」と迷懷の歌を詠じて辞任の意を洩した。彼はえが爲に帝の逆鱗に遭ふて、遂に攝州須磨の浦に流罪の身となつたのである。

△草履とり名残のうらを聞きはつり。

句解 俳諧師のお供して草履取どもが行く。さて俳諧は草庵ですが、侍の草履取にも俳諧の模様を話し合ひ、或は舩を漕ぐ。いつも夜更けになるので、彼等は閉口するが、名残の裏となるとお帰り近くなるので、「それら名残の裏だぞ。」など元氣よい侍仲間のかたが聲が聞える。彼等は度々長い夜寒にもよく待たされて居るので、門前の子僧ではないが、名残の裏といふ術語をば習はずして、其一部を聞き覚えて、得意さうに話し合ふ程になつた。

〔聞きはつり〕は聞きかじりに同じ。

△むざんやなはしごの下草履とり。

句解 草履とりは主人のお供をしては忠實を竭すものであるが、中にも吉原の遊廓へお供をして行つて、いつも階段の下にはかり待たせて置かれるのである。あの草履取はなんとまあふんものやあるよ。主従とは云へ、同じ人門にありながら、芭蕉の句「むざんやな兜の下さきりざりす」の文句を抜いたもの。

△隣から借りよう貧家のなれなれし。

句解 貧家の事として、常には碌々出入もせぬ隣の富豪に、年末とか何とか切羽詰つて来ると、今ヨイと隣から借りて来ようといつては、厚かましきも馴れ馴れしくお世辞をいふて借りて行くのであるが、實にあきれて物がいへない。《借りよう貧家の云々》謡曲「羽衣」《加陵頻伽》のなれなれし。《加陵》「借りよう」に「頻伽」を「貧家」に換つたもの。

△はすとは女三の宮のあたりなり。

句解 女の身嗜みのない者を、はす葉_{ハスハ}俗にお轉染といふが、かの源氏物語中に女三の宮と申す方は朱雀院の第三女、御年僅に十三四歳で、三十九歳の源氏の君の許嫁といふ仲であつた。性溫柔。

容姿艷麗で漸く源氏の愛を深めて行くうち、横合から柏木といか
色魔が現はれたので、遂にこれと通じ薫といふ男の手迄生れたの
であるが、これも宮のお側に仕へて居った小侍従が戀の仲立をし
た結果である。で、この女三の宮の周圍に居ったやうな女どもを
ば蓮葉娘と云ふのであると女三の宮の上を婉曲に評した句。

△姑の御意に七歩の詩を作り。

句解 姑と嫁の間の不和は珍らしくないが、之は姑が非常に慘酷且
つ無慈悲で、かの魏の曹孟が弟の曹植に難題を課して七歩の詩を
作らせたと同様に、豆殻で豆を煎るといふ如き邪見の双を振って
居る。嫁はその姑の御意に従つて、慘忍無慈悲な難題を素直に行
つて居る。七歩の詩は省く。

△その昔菜種の發句中の町。

句解 新吉原中の町は只今こそこんな繁華な場所となつたが、その
昔遊廓が建設されなかつた明暦前の昔は畑地であつて、「嚙」嚙さんら
廓の内の菜種さへ、「」といふ發句に作られた所、今は春毎に美しい
櫻を植えて賞觀するやうになつて、大層繁昌してゐる。(終)

第四十六回 川柳句會

課題「勤め」

齋藤一流選

谷本晚香

再建の明日へ備へる日々汗。

半生の汗が無になる古日記。

月給と別に奉仕の脈をとり。

濱口笛水

両親も褒められて居る成績表。

精勤を人の羨む今日の地位。

陰日向なく働いて羨なし。

北村子守

一日の汗を拭ふ扇風機。

朝起きも慣れて収容三年目。

土屋天眠

正直に勤めて父に愚痴もなし。

瀧川巴水

一日を勤め果した靴を脱ぎ。

河島次彦

月給にこだわりもなくよく勤め。

小町谷奉君

精勤証握つて帰る子の機嫌。

さも愉快さうに勤めの子が帰り。

月給と別に所内でよく勤め。

都地丘山

時局柄二度の勤めの古タイヤ。

精勤窓一枯に陽の恵み。

(感吟)

勤勞の汗も嬉しい子の育ち。

(佳)

森岡春山

好きな事も勤めとなれば樂でなし。

勤めだけ強いて権利は充れられ。

勤めから帰つて坊の馬になり。

(古川柳の
域を脱ぎ)

新屋軟葉

親の名も世間に知れる精勤賞。

陰日向なく働いて今日も過ぎ。

津村汀村

勤めから帰れば妻の待つ笑顔。

機嫌よく迎へて来れる妻があり。

竹原白雀

毎月を同じキヤツキの同じ色。

(佳)

月給へ西と東の共稼ぎ。

(佳)

従順に使命果して悔もなし。

関 五松

山西里江

嫁と云ふ名に黙々とよく勤め。

一日の勤めへ雨の朝を出る。

(感吟)

藤井孫六

活花へ通ふて妻の愚痴もなし。

堀田瓢池

毎朝の木魚の音も耳になれ。

(佳)

吉里竜耳

麗人が課長の出勤待つ事務所。(佳)

稲垣牧東

悠々として十六弗は柵の中。

稲垣秋月

月給と別に奉仕のペンを採り。

安井静女

忠勤は見逃されずして今の地位。

星野光葉

勤勞の心豊に朝を出る。

環境は十六弗へあまんじる。

鈴木緑松

忠勤を盡して逝つたる子を偲び。

安本時子

勤めもう止りて吉日待つばかり。

難波桂馬

義務果て事も出来ない配所の身。

國籍の相違兄弟敵味方。

薄給に甘んじて居る事務机。

橋本京詩

勤め先決つて父に日々愉し。

勤めから帰り楽しい子の相争。

滝川巳水

大過なく勤めて迫る改選期。(感吟)

よく勤め是非重任と鳴る拍子。(感吟)

精勤証見せて得意の子の笑顔。

第四十七回川柳句會

課題 不平

岡田柳華選

天位

速水白水

鬱憤の在り處を知る空ポケット。

地位

新屋軟葉

変り行く世相へうとく不平居る。

人位

鈴木緑松

配給にちいと不平を陰で言ひ。

五客

動乱へ不平の聲は高が知れ。

巴水

不運だと諦め切れぬ顔が集り。

笛水

ちつぽけな不平笑つて朝を起き。

桂馬

日割して見れば哀れな月給日。

一満太郎

病んでから不平がつる膳のもの。

次彦

佳句

出度りも何んだか母も他人めき。

白雀

若い者今の不平はもう忘れ。

静女

不平なき奉仕に鍬の汗となり。

緑松

信仰に生きて不平のない姿。

天眠

不平だが致し方ない多数決。

巴水

小ぼけな不平へ母の笑ひ顔。

晚香

不平なき日々を樂む深呼吸。

汀村

待遇の不満仕事に見せて居る。

五松

姉さんのお古ばかりと拘ねて着る。秋月

あの人もよいがと不平家とこまれる。望江

十九席不平の聲も聞きなれる。

耕一

不平家は暗い世界を持ちあさる。

瓢池

言ひたさの不満が析れる笑ひ顔。

金

百幾度十六席へ出る不平。

竜耳

躓いた石へ不平をぶちまける。

光葉

吐かろの不平ではない言葉じり。

桂馬

不平など忘れ木影の小半日。

京詩

不平なき家庭へ揃ふ健康美。

巴水

發言権ないが不平の一つなり。

金

川柳と獨創

作句一二年位すると入選率が少なくな

なる。然うすると「川柳は自分には向

かないのではないか」とか「川柳は素

文漫画式の極く軽い笑みではあるまい

か」と言ふ様な疑問が湧く。其時が即

ち幼稚園から小學に入學するところの

一段階である。かゝる倦怠期第一期を

突破し得て初めて、川柳に動きや、深

さなどの悟りを開くのである。次の

倦怠第二期には「新興川柳」と云ふもの

は面白い」と興味を持つたり、自分の

句の良否を選ば他の人々の句に對する

感受性が鋭くなつて来る。之が恰も中

學時代に相當する時なのである。

然しながら危険は眼前に迫りつゝあ

る。此時代は漸く獨立時代に入る爲

兎角、他の句が悪く見えて自分の句の
み良く見えるものである。即ち、批判
性完からずして、獨善に陥り、選者を
貶し、獨り快よしとする最も危険期で
ある。(以下次節)

曾て伊太利戰線に於て戰死なされし
故棚橋敬中尉の御尊父歌友宗二氏より
御悔みの書信に對し左記の短歌を賜り
ました。畑達いではありますが餘白を
戴いて掲載さして戴きます。潮風

世の常の愚痴をばおぼし永遠に

我が家にかへりきたりしと思ふ。

添削課題

音

次回課題

雨上り 選者未定 三句吐 締切十月十五日

母の唄 全 全 全

締切十月十五日



開く白蓮

長藤行精

はしがき

此一稿は去りし二年、入所してから當地にありし親子の心情を綴つたもので、逆境にある現在の私共の信念と修養の一助ともなれば幸甚の至りであるが、何令文藝に素養のないため幾多の遺誤缺點は御諒赦を希ふものであります。

雄々しき同胞の門出

春のやうな生き／＼とした、そして爽快な力と氣魂が満身に漲つてゐる若人の希望は澄み渡つた大空の如くはてしもない程高くして而も廣い。げにも此の尊い潑刺たる心は、其遠大な理想

に向つて躍動せずにはゐない。燃ゆる雄志は遂にすべての用意が整ふと、

「お父さん、行つて来ます。」

「うん！ しつかりやつて来い。」

「お母さん、行つて来よう。」

「おゝ！ それではいよく行くかえ。」

母は半ばは涙ぐみながら、

「何事も皆此方と異り氣候風土や習慣食べものに至るまで變つて、澤山の

人種の行つてゐる國だと近所の吉野や

んが言つてゐたで、昔から朱に染まれ

ば赤くなるこの道理、お前も悪い人間

に近よらんやうにして辛棒してお呉れ。

「はい！ 心配せんでも大丈夫ですよ。四五羊したら歸つて来るから安心して待つて。」

父母はいろ／＼と心をこめて語る。

親子は會話の間に村里離れた町の停車場に着いた。暫くして流車は雑多の思

ひを込めた人々を乗せて場内に車輪を休めた。

「定一よ！ 第一に身体を大切に
する事だよ。元氣なお前の顔さえ見せてくれれば良いから無理をしないでな、それから大事なことは家の敷居を跨いで出たらお互に明日も知れん不定の世、何うぞ親様(併様)の御名は何處に居ても忘れてくれるなよ。文は母の一念だ！」と渡されたものは小さい金欄の袋であつた。定一はそれを受取つて新しい洋服のポケットの奥に入れ、輝く彼岸の光りに彼の眼はくらんで聞き流した言葉を最後に、流苗もちとも流車は容赦なく乗客をゆすり始めた。一同の瞳に早や露は宿つた。

「お父さん、お母さん、左様なら
お達者で……。」

の聲も急に靜つて今は全身の勇氣を出しても物足りない思ひが彼の胸にひそ

んで幼の様に消えて行く。

今迄喜々として戯れ遊びし兄妹、明友、慈愛あふるゝ優しい親の膝下を離れ、住みなれし故郷の断ち難き一切の執念を打ち切つて、多くの若人は大洋を越えること二十日餘、船は一阜頭に錨を降した。

心に描きし希望の光は文明文化の粹を集めた都會の大小の建物と相俟つて虹の如く霧の中に浮いてさながら現在の心境が實を託して見え、同船の友と共に迎へられ、十年、数十年前の我等同胞の雄々しき門出の姿であつた。

2 綾なす人生

長き航海を無事に終へて夫々一定の地に荷物を解いておさまると、見るもの聞くもの皆若人の心の琴線に觸れぬものはなく、喜怒哀楽の中に夢の如く二三年の星晨は去つた。此の多くの若人

の中の一人、

『あゝ！ 斯うして毎日働いてゐるが、今年でもう三年になるが、お父さんやお母さんは何うしてゐられるか知らん……』

夏の雲のやうに勃然と定一の胸に両親のこと、弟妹達のこと、が浮んで来ると、彼は一夜おれこれと種々の思ひが交錯して、まんぢりと睡ることさへ出来ず朝を迎えた。親の明け暮れの念力が届いたのか、親を思ふ心が萌したか、

『おれは一度帰つて来よう。』

彼は決心がついてから故郷戸山村の地を訪れることゝなつた。それからヒサエ夫人を伴ふ加州の南部に華の家を結ばれる時、一家の大船が建造され、人生の廣海に棹さゝれてゐる中、大きな愛の光が彼の家に射し、一九二一年一月に長女正子さんが呱呱の聲を上げて、長男敬君、次女春子さん等と次

々に生れた。

喜びが多ければ苦惱心配事も亦増して行くは人生娑婆の習はしであるが、彼一家は幸ひ順調に運ばれて来た。然るに佛に虚語はなく迷界はすべて因縁により起滅し、波が風によりて起るが如く、世界人類の一大未曾有の不幸事が人々同胞の頭上に覆つて来た。

3 青年活躍の秋

同胞渡米して數十年の艱苦結晶の實は漸く稔つて愛児はそれ／＼美しく成長し、今は各自の片腕となつて、各親は一途に自己の寄る年波の鰭、白髪の殖えしことも忘れて悦びし時は東の間、東西兩洋の平和が遂に破れ、太平洋の浪高く、日系人親子の轉住移動が樂園の米國に發令さるゝことゝなつた。

いろ／＼の事情により父なき家、母と娘子の家は次々と増し、一家の内外

すべての大整理は老ひた母、若き娘の手ではなか／＼容易な事ではない。轉任の日は近づく。此紋に當って只一つの助けの小舟は二十歳前後の青年達のみである。

永年苦樂の中に育ぐまれた子供が、慈父は捕はれ行き、悲しむ母、行きし父の胸中を知らぬ筈はない。彼等青年は早速協力し各地にそれ／＼萬般の活動を開始した。

「小父さん自働車はあれから何う始末しましたか。」

「惜しかつたが四百五十弗で賣つて仕舞つたよ。」

「さう！ 小父さんはまだ新しいのに、私の知り合ひの者が七百弗で賣ふと言つて明日來ると話してゐましたか。」

敬青年は残念さうに隣家の松山氏に話つた。だん／＼轉任の日が迫ると共

に各地方の人名登録、身体検査、荷物の運搬、發送、保管整理等暑さに向ふ春の末、晝夜もいとはず不休の活動は無経験ながらも彼等により展開され、敬青年も同一員としてその巨軀を惜しみなく奉仕したのである。

4 愛児は病む

一九四二年五月十七日、敬君の地方の移動の日時は訪れて、五六百の一團と共に當のストン收容所に彼等一家が着いたのはその日の夕方であつた。それより同道の人々の大小の荷物は青年達の手によつて、運搬配達され、数日の後青年達はそれ／＼キャンプ事業に就き、敬青年は電氣課に務め、専心初夏の暑さと戦ひ後人のため働き續けた。

「もう出勤の時間よ、起きなれば……。」

或る朝母のヒサエは睡い盛りの若者

の心を察して、ためらい乍らベッドの
側立つと、

「お母さん今日は休むよ。」

「何うして！ 時間でも遅れたから

かい。」

暫らくだまつてゐた敬は、

「少し頭が痛いから。」

と返事をして彼はフトンに肩に引き
寄せた。

二三日たつても彼の熱は下らないの
で醫師の来診を受けると、入院させた
方がよいと云ふことに、両親は早速一
人息子敬の敬青年を病院に送ることにし
た。十日二十日と日数は過ぎたが彼の
容態は大した変化もなかつた。常々親
に心配をかけまいと心がけてゐた彼の
立退前よりの無理な働きと、子供なり
に張りつめてゐた強い心が一安心と共
に解けたが爲に、此病はと化したので
はあるまいか。
(つづく)



忘れぬその風味
に愛用の節は

マル昭を

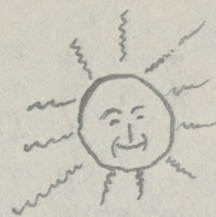
アリゾナ州グレンデール市

昭和醬油醸造会社

"MARUSHO"

SOWA SHOYU BREWING CO.

Rt. 2, Box 51, GLENDALE, ARIZ.



小品

技師長

木内春波

技師長が行方不明になつた。グヨウさん、一様、と呼ぶよりも技師長と言ふ方が私の部落では大人は言ふ道もなく、子供までにもわかり易くホピユラーであり、本人も此通稱で呼ばれる方が満足であるらしく、時々本名を呼んでも返事をしないことがある。私には此收容所に来るまでは未知の人であつた。何でもバーカスファイルド山に住んで居たとかで仲々の変人である。氣のやさしい親切心のある男ではあるが、俗に言ふ変り者で仕事といふ定つた仕事は決してやらない。やつても三日とは一つ仕事が続かないし、さうかと言つて唯ブラ／＼遊んでゐるのではない。頼ま

れなくとも部落中の掃除をしたり、ガ―デンの手入を自分の事のやうにやつて見たり、魚池や築山の設計をしたり、公衆のためになる事は骨を惜まらずよく働いた。部落長が感謝の意味で部落カ―デナ―の働きカードを取つてやると、四五日で辞職を申し出て終つた。兎に角時間で縛られたり氣の向かない仕事は、たまらなく窮乏であるらしい。金山の話や探鐘の話が好きで、よく昔話をする。技師長の名稱も蓋し此所から出たらしい。私達には此所へ来で與へられたバラツクの室は、埃ぼくつて屋根裏の本肌が見えるので入所當時は可成いやな氣持がしたのだつたが、技師長にとつては餘り綺麗すぎて却て住心地が悪いか、早速部落から四五百尺離れた土堤の上にマスキドの横や蒲の葉で奇麗きはまる小屋を建て、其處を住家にしてゐた。私達はこれを技

師長の別宅と呼んでゐた。

校師長は仲々のいか物食ひで牛肉は油身、ハム類は骨、魚は頭と言つたものを好んで喰べる。たまに誰か鈴蛇でも見附けると、それを貰つて如何にも珍味だと言つた風に別宅の方で調理する。ギヤロンのブリキ罐でワインも醸造すれば濁酒も作る。それを呑んでいゝ氣持になると探鑛の話をする。この男の過去をよく知つて居る人は余り居らないやうである。何でも昔からのプロスペクターで山に生活して金鑛探見をしたりインデアンの古蹟を調べたりして暮して居たらしい。この男は一握りの米、一本のブレードがあれば七日でも十日でも生活出来ると言つてゐる位だから可成粗食で身体を鍛へた男らしい。日本教育も相應あるやうだから前身を調べたら意外な人物のなれ果であるかも知れない。

何時までたつても仕事カードを取らないから拾六郎と衣服料の三弗五十仙を貰へない。だから金は持つて居らない。持つて居らなくとも困らないし又心細くないらしい。何時か煙草代はどうしてゐますかと聞いたら、『なかに煙草代がなくなつたら所長か副所長から貰つて来るさ』と平然としてゐた。事實、時々行つては貰つては来るらしかった。少しでも餘計に貰つて来た時は部落の子供達に菓子を貰つて奢つて終ふ。無一文になると又出掛けて貰つて来ると言つたふうに仲々暢氣で無慾な人である。

時々山に登つて二三日位歸つて来ない事があつて、戻つて来ると必ず牛や馬の白骨だの、インデアンの皿だと言ふやうな名目を付けて古物を拾集して来る。近い将来にインデアンの骸骨を半ダズンばかり集めるのだとも話し

てゐた。

この名物男が私の部落から忽然と行方が不明になった。三日経っても四日過ぎても此熱い沙漠の炎天に何處へ行つて終つたのか歸つて来ないで、部落の人々は騒ぎ出した。以前の此男なら左程でもないが、此處二三ヶ月はほとんどうに俗人のやうに氣持が沈んで、ぢーつと考へ込んで居た事があつたと同宿の人等の話で、従来の技師長とだいがん違つてゐた。ことに依ると浮世の無情を感じて自殺でもしたのではないか。兎に角此まゝで放つては置けないと言ふので、先づ部落の人々だけで搜索を始める事にした。

水を入れた徳利と食堂で作つて貰つた辨當を頸にぶら下げて、私も其搜索隊に加つて行つた。沙漠のブラシユの中、マスキドの針の林で顔面を引撥れながら、熱い太陽の直射を受けて終日

歩き廻つたが、夫らしい姿も死骸も見付からなかつた。夕方になつて、此方が死骸になりはしないかと思ふ程疲れて歸つた。

デマに明けてデマに暮れる收容所の事だ。口から出放題のことを真しやかに言ふ人さへ出て来た。或人が狐狗狸さんにお伺ひすると、「コロラド河で死んでゐる。明朝四時半に死骸が浮き上る。」と云ふので、朝の三時頃に叩き起されて四哩餘りの道なき沙漠を辿つて行つて見たが、死骸どころか襦袢一枚浮き上つて来なかつた。其晩の狐狗狸さんの御神言が仲々振つてゐる。『見附かれない筈だ。岸から三十尺の所を二十五哩の速さで流れて行つた。』と言ふのである。又もや搜索隊に召集されて、第三館府の河岸、死骸の引懸りさうな處、ブラシユを潜つて炎天の下終日歩かせられたが、それも終に無駄であつ

た。かくして部落の人々は勿論、隣接部落、第二第三館府の人々を、一週間も煩せた搜索も無効に終つて、一まづ搜索を打ち切ることに定つた。

部落の名物男の行方、生死の程も不明になつて部落は又元の平静に歸つた。私は夕方赤い血のやうな、疲れた沙漠の太陽がコロラド河邊りに沈んでゆくのを眺め、庭の木蔭に座つて油蟬の慌しい鳴声を聞きながら、何處ともなく消えるやうに行方不明になつた技師長の事どもを思つてゐた。そして何處に居つてもよい。生きてゐて呉れるやうにと祈つた。それは彼の男を知つて居る人々が言ふ通り、彼の男の事だ、館府生活や俗人臭味が嫌になつて、再び人里離れた山に入り、自然を楽しみ、口先だけの心にもないお世辭を言ひ交す人間汚さから離れて生活してゐるのであらう。私はどうしても彼の男が

無事に生存してゐるやうに思はれるのである。とまれ、此所に收容されて以來一つ鍋の飯を喰つた仲間である。人間一人の命は尊い。死んで何がよからうぞ

油蟬の聲につれて四邊は追々と暗色に包まれて吹く風が熱い。その薄闇に浮き出して堤防に建てられた技師長の別荘が見える。地球は無音のまゝ人生を棄せて廻轉してゐる。私はもう彼の男に再會する機會はないかも知れない。生きて地球と共に廻轉してゐるが、死んで別の世界に安らかに眠つて居るか大きな？。を失して人ひとり私の部落から消えて行つた。

蟬はまだ鳴き止まぬ。四邊はもう墨繪のやうにぼやけて隣接の部落から、『妻恋道中』のレコードが風に棄つて聞えて來た。(終)

八月八日記



物外和尚の豪勇力(下)

土屋天眠

物外和尚が七十二歳の折、徳川幕府は端なくも長州征伐の令を下した。そこで和尚は老軀を提げて京に上り、京都の南禪寺畔に居を構へて、密かに志士の間を往来し、朝廷と長藩との間に立ち、居中調停の勞を取るべく奔走して居た頃のことである。

和尚が或る日偶然に一道場の前を通り掛ると、竹刀の音の囂しきを耳にし、元より自分の好きな道の事とて、何の氣なしに近寄つて隙間見をされたのであるが、名にしおふ此道場は當時新撰組の隊長として武名を天下に轟かして居た、幕臣近藤勇の道場であつた事などは、毛頭知つて居らう筈はない。然るに道場内の或人物が之を見附け出して、

「これ／＼坊主、武士の道場を覗くなど、は怪しからん不埒千萬の至りぢや、さあ／＼早速中に這入つて、一と仕合致さぬ分には、其儘には捨て置き難い」と怒鳴りつけた。

「これは／＼粗忽の段平に御容赦を願ひ奉る。何分にも最近京に上つた許りの、ほつと出の田舎坊主、殊に出家の身の、武藝の事など固より知つて居らう筈が御座らぬ。何卒右の儀御許し置かれて下され。」

と、平身低頭して説び入つたが、いづかな聞入ればこそ、とう／＼無理無体な、引張り出されて仕舞つた。

和尚も詮方なく、

「左程に御望みとあらば、是非に及ばぬ。不束ながら御相手仕らう。」

「然らば御道具を着けられよ。」

「いや柄は出家の身、此まゝにて宜敷う御座る。」

と、右手に鉄如意を持ったまゝ、仁王立に立つて、

『一人二人は面倒で御座るから、相手になるなら、御一同一度にかゝり給へ。』

と、大きく出た處が、一同の者は怒氣心頭に徹して、烈火の如くいきり立ち、

『己れ傲慢無禮なる糞坊主め、目に物見せて呉れんず。』

と、前後左右から一度にどつと打ちかかったが、腕に覺のある和尚は瞬く間に鉄如意を以て、多勢の竹刀を叩き落して仕舞った。すると最前から遙か上人の武士、いきなり長押に掛けてあつた大身の槍を取るや否や飛鳥の如く躍り出した。

『これは／＼そこもには、御見事な御腕前、弟子達の到底及ぶ處では御座らぬ。拙者は近藤勇と申す者、いざ一仕合御願ひ申さう。』

と、弟子達の仇、其儘には相成らぬと云つた権幕、和尚は之を聞いて驚き、

『先生には方今全國に其名を知られた武道の達人、我等如き糞坊主の到底及ぶ處に非ず、其儀は眞平御免を蒙り度し。』
と、叩頭して平ら謝りに謝るが聞き入れゝばこそ、

『否や／＼最前の御手並み、斯道の名人たる事疑ひ御座らぬ。サア／＼。』

と、急ぎ立てられて、否むに由なく、然らば止むなき儀、御教授に預らう。』

と、和尚は例に因つて例の如く、鉄如意を持つて立上ると、勇は承知せず、

『凡そ武技を闘はすには、古来より一定の道具がある。竹刀か鎗か其一つを選ばれよ。』
と、云ふ。和尚は出家の身なればとて、

『是にて充分なり。』

と、只管拒む。勇は容易に聞き入ればこそ。そこで和尚は、然らば是で御相手致さうと、頭に掛けて居た頭陀袋の

中から木梳二個を取出し、左右の手に
木梳の縁尻を握つて身構へた。

之を見た勇は烈火の如く怒った。そ

れも実筈、人を馬鹿にした態度である。

流石は當時新撰組の鬼隊長と呼ばれて

舞ふ鳥をも落す勢ある者の、槍を受け

るに木梳二個とは何事ぞ。己れ一と突

に、凝と睨んで身構へたが、勇は機

會を狙つてエイツと云ふ氣合と共に、

渾身の力を槍の穂先にこめて、大盤石

も透れと云はん計りの勢で突出した。

あはや和尚は芋どしにされたかと思つ

たが、其手は喰はずに、鬼神の早業ひ

らりと體をかはして、前を流れた槍の

蛭巻をば、二個の木梳を持ちて確つか

と換んだ。危機一髪の妙技、勇は失敗

つた。仕損じたと一心不乱になつて、

槍を引かうとあせるが、動かばこそ、

勇の全身に流るゝ汗は、恰も瀧の如し

である。勇は絶体絶命、こゝ一番が関

ヶ原と、死力を盡して槍を自分の手元
へ引いた途端に、和尚はカイツと氣合

を掛けて大喝すると同時に梳を離した

から堪らぬ。勇は後へドシンと尻餅を

つくと共に、大槍は二三間向ふへ突飛

んで仕舞つた。門弟共は此有様を目撃

して、唯呆然たる許りであつた。

すると勇は直ちに起上つて禮儀を正し、

『さて、貴僧には忍入つた御腕前、勇

感謝の外御座らぬ。して貴僧の御名前、

〆初は備後の僧物外と申す者。』

扱は天下に名たゝる拳骨和尚で御座つたか。

と、奥へ請じて先程からの無禮を謝す

ると同時に、厚く響應して歸したと云

説である。

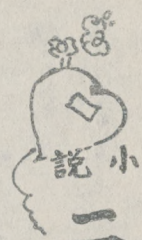
まだ此外にも和尚がある場所、基

盤の中へ基石をピシ／＼と詰込んだ話

や、其他數々の武勇談があるが、余り

長文に失する恐れがあるから、此處ら

で一と切りにして置く事にしよう。(終)



二世の悲戀 (第二回)

芳川 積三

龍宮の乙姫様との戀を逃り、世の中の幸福を一身に集めた様な思ひの喜びにひたつて居る今日此頃の省次は、何を食べても一際味ひがあり、見聞きするもの凡てが楽しいのである。従つて家業にも身がはいるやうになつたが、夫れと共に愛人スーザンとジョイ・ライドする數も多くなるにつれ阿漕が浦の例に洩れず、何時しか人目につく様になつてぼつ／＼町の噂に上る様になつた。それが爲か否か、ある夜半何者か彼の店へ投石した。それが二三度繰返された。之に就てグロッセリーの井上さんも非常に心配して彼是と注意をした。言はれる迄もなく鋭敏な彼は早く

から、身边に危険が迫つて何時思はない災厄が降りかゝるかも知れないのと思つて、兎玉林にも今迄の事情をすつかり打明け前後策を相談の上、幸ひ羅府花市場の目抜の場所を持ちた人が帰國するので、其處を昵戀の松本と共に同出資の許に買ひ受り、パサデナの方の店は彼等に任せ、省次は羅府市場の方をやる事にした。そしてスーザンと密の様な逢瀬を樂んで居つた。或日何時もの様にフリント方面へジョイ・ライドした時、何時になく彼女の浮かぬ顔を恋する者の敏感さで見とつた彼は、

「スーザン、今日は馬鹿に元氣が無い様だが何處か悪いのぢやないか。」

と聞いた處、彼女は涙ぐみながら、

「いいえ何處も悪いのぢやないのよ。」

わたし今日お店で通も不愉快な事があったのよ。あんたが氣を悪くすると思

つて黙つて居つたのよ。

と答へた。

『スーザン、何を云ふか、二人の仲はそんな水臭いもんではないのだぜ。』

『では私、話すわ。今日のお晝休み
の時意地悪が寄つてたかつて、私の事
をジャップを恋人に持つなんてアニマ
ルの様な女だ。私の様なものと一緒に
仕事をするのは、自分達の身が穢れる
から部長に言つて断つて貰ふ。など、
連もひどい事を云はれたのよ。』

と云つて流石口惜しかつたと見え、
わつと彼の膝に泣きくづれた。省次は
慰める言葉もなく唯、すゝり泣く彼女
の背を撫で擦するのであつた。嗚咽の
中から彼女は聲を繼いで、

『そしてね、あの仲好のアリスやドロ
シーからも、お附合を断られたのよ。』

と云ひつゝ、彼の手を固く握り緊
めた。

『省次、わたしは世界中の人から見
離されても、あなたさへ見捨てずに可
愛がりて下すつたら、それで満足して
生きて行かれるのよ。省次、何時まで
もね。』

と云ひつゝよよと泣いた。

『スーザン、僕等の之から歩む道は
迫害、壓迫の茨の道だが、僕は命に換
へてもお前を離さない。いや今の僕は
お前がなかつたら生きて行かないのだ。』

と云ひながらひしと抱擁し、暫し二
人は戀の陶酔境を彷徨つた。そして夫
れから間もなく或る朝彼女が何時もの
様に出勤すると部長が、一寸用事があ
ると内談室に呼んだ。

『まあお掛け、一寸あなたには嫌な
話ですが……外でもありませんが、あ
なたが人もあらうにジャップを恋人に
持つて、よくジョイ・ライドするのを
見掛けると云ふ話だが私は信じない。』

而し萬一そんな事があるとしたら世間の思惑もあるし、此店の名にも關はる事だし、それに他の店員達からも喧しく私の所へ苦情を申込んできて居るから、以後は氣を付けて貰はなくはないかん。特に相手がジャツプだとなんたの親御さんの名にも關はる。

それ迄彼女は唇を噛んで聞いて居たが、きつと顔を上げ、

『部長さん、貴方はジャツプ／＼』

とよく古はれますが、親が何國人であらうと立派な米國市民です。貴方は沿岸各地の公立學校に通學して居る日系児童の成績表を御覧になつた事がありますか。殆んど何處でも、彼等の成績は白人児童を凌駕して居ります。夫は如何に日系人が優秀であるかを實證して居るのです。多くの白人が日系人を毛嫌し蔑視するのは、一種の嫉妬からくる憎惡心に過ぎないのです。夫にし

ても、私が何人種と恋をしやうと他人様から彼是言はれる筋合はありません。それでお店の名に關はると仰しやるなら、私は今直ぐに止めさして戴きます。とキツパリとさう云ひ切つた。

『まあさう一概に腹を立てられては困る。あんたのお父さんや、兄さんからもあんたの身に就いて呉々も御依頼があつたのですから、何れ私から一應御相談致しますから夫迄お待ちになつたら如何です。』

と部長はなだめた。

『有難うございますが、そんな事迄立入つて貰ひたくないのです。』

さう云つて、彼女は無理に暇を取つた。そして家へは帰らず、其まゝ電車で省次の店へ行つた。

『省次、ナツシユの方は今辭職して来たのよ。』

と云つて淋しく微笑んだ。豫期して

居た事なので省次は別に驚きもせず。

『さうかい、丁度いゝ所へ来た。忙
がしいからお前も一寸手傳つて呉れな
いか。お晝すぎになれば少しは暇にな
るから、そしたら僕のアパートへ行っ
てやつくり話をしようぢやないか。』

そして午後は店を店員に頼んでアパ
ートへ彼女と伴つて帰り彼女から今朝
の出来事を一部始終聞いた。

『それで何かい、家を断つて此方へ
来たのかい。』

『いゝえ、お店を出ると其儘電車で
直ぐ来たのよ。』

『さうかい、僕等はどうしても行き
着く所まで行かなけりやゝならないの
だから一度家へ歸つて、お父さんやお
母さんは一應話して見るさ。丁度うち
も手不足で困つて居て、今一人頼まう
と思つて居た所だから、お前が来て呉
れゝばそれに越した事はない。』

と云つて一寸言葉を切り、

『此アパートの主人は、逆も日本人
鼻肩だから居心地がいゝよ。まだ僕等
は結婚許可証を取つてないのだから、
一時も早く其運が附けやう。夫迄幸
ひ隣りに空室があるから、それを借り
てお前の居室にしやう。兎も角家へ歸
つて、両親に旨く話して来るさ。』

『えゝ、ではさうします。お父さん
は逆も難しいから、お母さんにだけ断
つて来ます。』

彼女は、其夕暮家に歸つた。既にナ
ツシユ百貨店から話があつたものか、
両親は酷く不機嫌顔をしてパーラーに
待つて居た。スーザンが這入つて行
くと父親が、

『スーザン、そこへお掛け。今日ナ
ツシユの方から話があつたがわしう娘
はそんな馬鹿者ではない筈だ。而も相
手がジヤツプなんて、そんな事は無い

とわしは堅く信ずるのだ。假にもわしは此町の親合とか蜂の頭とか云はれて、多少とも人に立てられて居る者だ。とまれ、お父さんは本人のお前から眞實の話を聞きたいのだ。

言はれて彼女はきつと顔を上げ、

「お父さんも、ナツシユの部長さんの様によくジャツプ」
と言はれますが、私が日系人と恋をするのが、何故さう悪いのですか。

「黙れツ、人非人、よくもしやあ、くとしてそんな事が言へる。ジャツプなんて聞くも穢らわしい。わしは断じてそんな事は許さんぞ。出て行け。若し貴様がジャツプと同棲する様な事でもあつたら、そのジャツプを誘拐罪、白痴法で訴へてやる。」

と、父は怒鳴りつけた。スーザンはわーつと泣きながら、傍の母親にしがみ附いた。

「あなた、もう少しお静に仰しやうたらいいぢやありませんか。見つもない。大きな聲でお隣りに聞えますよ。」

「あなたは子供に甘過ぎるから、こんな不始末を仕出かすのだつ。」

「あんた父の子供ぢやありませんよ。それに、たつた二人しかない大切な子供ですよ。さう、がみ／＼頭から言つて貰ひますまい。」

さう言はれて父親は、何か口の中でぶつ／＼云ひながら、後に手を組んで室内を行きつ戻りつするのであつた。母親は娘を勞はりながら、彼女の室に連れて行き、

「スーザン、心配おしでないよ。お母さんがいゝ様にして上げるからね。今日はお父さんは不機嫌だからね。」

彼女は嗚咽しながら領いた。

翌日、省次は店の方は臨時雇を入れ、アパートで彼女の来るのを待つて居

つた。所へ母親を伴つてスーザンが来た。

「省次、これが私のお母さんよ。」

「初めてお目にかゝります。僕省次です。」

「私、スーザンの母で御座います。」

昨夜色々これの話を聞きました。何分

宅が喧しいものですから一寸煩いので

すが、私が兼知で御座いますから、善

は急げと申します。一日も早く結婚許

可証を取った方が宜しいと思ひます。」

「はあ、有難うございます。それで

は恐入ります。が次の月曜日、ローガン

ビルのメリノール教會で、リブレー親

父に司式して頂いては如何でせうか。

お母さん、御参列して下さい様お願い

致します。」

「それでは、私は一應帰りますから

スーザンを頼みますよ。」

運命の神は、相愛の此二人に幸福を

與へたであらうか。

突然、其夕方来る七日桑港入港の、

エヌ・ワイ・ケー・ラインの龍田丸で、

彼の父親が着く故出迎へに来いといふ

電報が来た。お父さんは何んで前觸も

なく、来たのであらうか……若し

やと思ひ當る事がある。それを思ふと

彼は居ても立つてもゐられなくなる。

傍に見てゐる彼女は、

「あなた、お父さんが急にお出にな

つたのは何か重大な事でも起つたので

せうか。」

「さあ、俺にもよく解らないが七

日とおふと僕等の教會へ行く日と同じ

になるが困つたな。」

「丁度いゝぢやありませんか。私共

の結婚式を延ばしてお父さんにも列席

して戴いたら。」

「それもさうだね。」

と、彼は氣のない返事をした。兎に

角結婚式を延して父親を出迎ふべく船

の着く日、彼一人自働車を驅つて桑港へ行つた。當日税関の検査も遅滞なく龍田丸の巨体は棧橋に横付けとなり。何千といふ出迎の人々に混つて、彼は絶へて久しき懐かしい父の姿が現はれるのを待つて居つた。廳で間もなく片手にスーツ・ケースを下げ、歩む足取りも元氣にがっかりとした父が降りて来る。

其後に慎ましく附いて来る娘を見た。

『矢張りさうだ。三保のふじ子さんだ。俺と許嫁のふじ子さんだ。氣の毒な事になつたが仕方がない。』

と、心の中に思ひつゝ父親に近づいて行つた。早くも彼を見出した父は、遠くの方から流石嬉しそうに、にっこりと笑ひながらやつて来て、スーツ・ケースを下に置き両手で彼の肩を掴んで、

『省次ッ、達者かッ。』

『はい有難うございます。お父さんもお達者の様で。』

『いや俺も憎まれ子に憚るといふ奴さ。』

と云ひつゝ後を振り返り、

『ふじ子も學校を卒業したから、お前を何時までも一人で置くも心許ないと思つて早速連れて来た。』

『ふじ子さん、お久し振りで御変りも御座いませんか。』

『有難うございます。省次さんも御変りもなく。』

米國生れとは云へ、小さい時から日本教育を受けて育つた彼女は優しい可憐な娘である。

『何だ、お前達夫婦がそんな他人行儀の挨拶をする奴があるか。』

二人はどぎまぎしながら顔を赤らめた。『それぢやーお父さん、今晚桑港に一晩泊りますか。』

『いや俺も何かと國の方が忙がしいから、ふじ子とお前と一緒にゐた所

を見、そして二三の舊い友達を訪ねたら直ぐ帰る積りだから、ふじ子の荷物の後からエキス・プレスで羅府に送る事にして、えらからうが今から直ぐ羅府のお前の家まで飛ばして呉れ。」

「ぢや、さうしませう。」

彼は父とふじ子を乗せて、一〇一の國道を疾走しつゝ父と話を交すのであった。

「お父さん、羅府で何處へ泊りますか。」

「何處と云つてお前はまた家を借りてないのか。」

「アパートを借りて居るのですが、

狭くて逆もお二人をお泊めする事が出来ません。」

「何、俺は何處でも宜いが、ふじ子は入籍手續きも済んで旅券もお前の妻となつてゐる。何も心配はいらない。

いくら狭くても夫婦だから遠慮する事はない。なあ、ふじ子。」

と云つた。省次はこれと聞くと、はつとして危く自働車の轆を取り損ふ所であつた。彼はハンドルを握り乍らあれやこれやと思ひ惱んだが、羅府に着くと勇氣を出して都ホテルへ横附けにし、上等のルーム二室を借り、果敢に取られて居た二人に委細構はず、さつさと借入れた室に伴つた。そして二人を日本風呂に入れ、支那料理を取寄せ種々と面倒を見た後一寸寛いで、

「お父さんにも、ふじ子さんにも、今直ぐお話しして置かなければならない事があります。」

「何か知らないが今晚は疲れて居るのだから、話は明日にしてはどうか。」

「いや、さうしては居られないのです。甚だ申難い事ですが、實は私はある白婦人と事實上夫婦になつて居るのです。」

「えっ！。」

(續)

編輯後記

○一夜の雨に潤されて、めつぎり涼しくなつた。夏中、私達の爲にあの炎熱を和げてくれた柳の葉は、風もないのに一葉また一葉と落ちてゆく。秋の感じが深い。可さあ、これからが僕等の世の中だ。いつ見ても壯者を凌ぐ程元氣で愉快な人氣男、アインシュタイン博士(玉岡貫一氏)がさうなひ乍ら窓外をゆく。可どうも、かう暑くては、と怠け者の遁辞が通用しない秋である。内に、外に、精神修養に、はた肉体鍛錬に最もよい季節とはなつた。可物思はする秋も、灯の下に好きな書を繙き、或は過去を、現在を、そして將來について思ひを潜める秋だ。我等の『ポストン文藝』十月號は、その秋に相應しい表装と内容で皆様を訪れます。御愛讀を願ひます。

○本協會に御寄附下さつたサンタフェーの高原吟社、迎田勝馬總發、谷無聲、岡宮石堤、藤江海風の諸氏、マンザナの山

田狂月氏、第四十六部落の久保三綱、津村汀村両氏並びにユタ報社に對し謝意を表します。

○本誌印刷に盡力してくれた森田さとし君はシカゴへ、又本誌製本に毎號御奉仕下さつた浅野メリ嬢はフィニックスに夫々轉住された。御兩人の御多幸を祈る。

○野田、曾我部、長谷川其他の諸家より玉稿を寄せられて居るが、誌面の都合で次第に割愛した。諸家の御諒恕を乞ふと共に、讀者諸賢の御期待を乞ふ。(N・M)

『ポストン文藝』

第貳卷第八號
一九四四年十月號

編輯人

松原信雄
有田百
島原潮風

印刷所
發行所

ポストン印刷所
ポストン文藝協會
UNIT I CITY HALL,
POSTON, ARIZONA.

DENVER SAUCE COMPANY
 MANUFACTURERS & PACKERS
 FAMOUS HANA BRAND FOOD PRODUCTS
 3206 1/2 VVING ST., DENVER 2, COLO.

(花) 印 梅干

コロラド州デニバー市
 傳馬醬油会社

(花) 印 醬油

モダン Modern FOOD PRODUCTS CO.
 食料品商會
 花 印 醬油
 梅干 佃煮菜
 元カネーショ印
 一子販賣
 MEICHING
 味の素
 梅屋センベイ
 其他日本食料品
 一切

*Compliments
of*

NOBE YOUNGSON CO

野辺ヤングソン商会

WHOLESALE DISTRIBUTORS

JAPANESE FOOD PRODUCTS

DENVER, COLO

煎餅菓子羹

製造卸販賣

品質本位社会奉仕
安價提供を旨とし
多少に不拘御用命の
程願います

梅屋商店

デンバー市

ローレンス街一九四六

UMEYA COMPANY
1946 LAWRENCE ST.
DENVER, COLO.

Vol. 2, no. 8
Oct. 1944



POSTON POETRY CLUB
UNIT 1, CITY HALL
POSTON, ARIZ.

